
とある私の物語～ネギまに転生ですか？～

lapaid

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある私の物語〜ネギまに転生ですか？〜

【Nコード】

N5019Y

【作者名】

lapaid

【あらすじ】

ある日私は真っ白い空間にいました。そこには自称神と名乗る人物が。

話を聞けば転生させてくれるそうです。何でも神様のミスだとか。所謂テンプレってやつですかね？

希望を聞いてもらって、向かう世界は「魔法先生ネギま！」だそうです。まあ、魔法やらなんやらで危険ではありますが、楽しめそうではありますね。

目が覚めると…えっ？なにこの設定？いや、悪いとは言いませんけど…ハア…

初投稿です。アンチ、チート、原作改編、自己流解釈など結構やかかしてますので気を付けて下さい。

プロローグ（前書き）

初投稿です。

拙い文章ですがお楽しみ頂ければ…

プロローグ

「知らない天井ですね。」

取り敢えずいつてみたかったこの台詞。

周りを見回しますが真っ白です。何もありません。距離感がおかしかなりそうです。

「というか、何故こんなところにいるのでしょうか？」

それに、もう一人が居ないのです。

「すまんのう…ここは何処でも無い場所じゃ。」

いきなり「いかにも」な方が現れました。
驚きましたよ。

「その通り。儂は神じゃ。」

「GODの神ですか？なにせよ説明を頂きたいのですが。」

「ここは本来死ぬべきではない人物の来る場所じゃ。」

「本来死ぬべきではないとは？」

「儂は名前こそ無いが最高神での。部下がミスをして本来寿命でない人がここに来るのじゃ。」

「役所が個人を管理していた書類をシュレッターにかけて再起不能

「なったって感じですか？」

「そんな感じじゃの。というかお主の言った出来事のままじゃが。」

「うわぁ……でもなんか……うわぁ……」

「そこは申し訳ない。さて、ここに来た人物は主に三通りの選択肢があるぞい。」

「三通りですか。」

「うむ。」

「1つ目はこのまま天国に行くことじゃ。普通の輪廻に交じるということじゃ。」

「2つ目はここで仕事をする。下級神となって、人の管理をする。もちろん、ワーカホリック位しか選ばんがの。」

「そして3つ目、二次元の世界に転生することじゃ。」

「では3つ目で。」

「早いのうち……まあどれを選ぶも個人の自由じゃからの。いく世界は決まっておるが良いかの？これは決めた後にしか伝えられんのが。」

「ええ。3つ目をお願いします。」

「ふむ……行く世界は『魔法先生ネギま！』じゃ。お主の記憶を見たが、この世界を知っておるようじゃの。」

「それで、じゃ。行くに当たって希望したいことはあるかの？3つまでなら聞くぞい？」

3つかあ…慎重に選ばないとなあ…

「おっと、先に言うておくが、気や魔力は最初は平均より高めじゃ。特訓すればただけ伸びるようになっておるぞ。あとは不老じゃ。20歳からの不老じゃの。」

意外とありがたいサービスがついていた！
とするとまずは…

「東方projectの八雲紫の能力、『境界を操る程度の能力』
をもらえますか？」

「ほう…なかなか良いのを選んだのう…それに見合うだけの演算能力もつけよう。」

これはありがたい。

「では…『魔法先生ネギま！』の世界の魔法や気の知識を頂けますか？」

「知識だけだと使用はできんのじゃが、良いかの？」

「それは特訓すればいいんでしょう？」

「その通りじゃ。使用出来る状態からスタートも出来るんじゃが、それでも良いかの？」

「ええ。構いません。自分で特訓するのが好きなので。3つ目ですが、原作の大戦に関われるようにしてもらえますか？」

「なるほど…了解じゃ。もう一人はちゃんといるから安心してよいぞ。」

ここには居ないですけど…

「向こうに着いたらわかるぞい。」

「そうですか。」

心を読まれたのはサラッと流す。

「ではお主を送るからの。ゆっくりと世界を楽しんで来るがよい。」

神の言葉を最後に、私は意識が落ちた。

く麻帆良武道会く

こんにちは。転生した「私」です。

確かに大戦に関われるようにしてもらえますか？と言いましたよ。言いましたとも。

ですが

「ここが麻帆良かゝすげえな！強いやつと戦えるぜ！」

横にいるコイツ、誰だと思えます？

そうですね。ナギ・スプリングフィールドですよ。

「戦いたいののは分かったから。エントリーしに行きますよ。」

「そうだったな！んでユキ、何処か分かるか？」

「ガイドブック読めばわかるでしょうに……向こうですね。それっぽい人もいますし。」

私の名前はユキ・スプリングフィールド。ナギの双子の姉として生まれました。

ちなみに転生したというのが分かったのは5歳の時、それから『境界を操る程度の能力』が使えるようになりました。

で、私は10歳で魔法学校を卒業、旅に出て行方をくらませようかとしたらナギが中退してついてきました。

あ、卒業後の課題はなかったですよ？あの仕組みは大方大戦後に来たんでしょう。

行方をくらませようかとした理由は単純で、能力を手に入れたのをごまかそうかと思ったんです。どうせしばらくしたらゲートポートに行つて魔法世界に行くんでその時にでもやりますが。

ドンッ！

「あ、すみません…」

考え事をしていたのでぶつかつてしまいました。見上げると若い青年です。大きな野太刀を背負っています。

「こちらこそすまなかつた。考え事をしていたもので。」

「お！お前強そうだな！武道会に参加するの？」

「ああ、そのつもりさ。君たちはどうするんだい？」

「私たちも参加するつもりです。貴方とは当たりたくないですね。中々の手練れのようなので。」

「はは。そう言ってもらえると嬉しいね。」

「俺は戦つてみたいぜ！お前、名前はなんだ？俺はナギ・スプリングフィールドだ！」

「私はユキ・スプリングフィールドです。」

「俺は青山詠春さ。それじゃ、健闘を祈るよ。」

そのまま軽く礼をして歩いて行きました。

詠春でしたか…まだ近衛では無かつたんですね。

そのまま歩いて行き、エントリーしました。ちなみに私が参加すると言つたときの参加者名簿をつけている人の驚き方は凄かつたですね。まあ、見た目はただの女の子ですからね。

さて…大会が始まりました。予選はバトロワ形式でした。一言で言わせてもらおうと

「雑魚ばかり」

でした。見た目で人を判断してはいけません、ということを知りませましたよ。

んで、本戦です…が、結論から言います。私とナギ、詠春意外は雑魚でした。

私は『戦いの歌』で身体強化、そのまま肉弾戦に持ち込んで勝ちましたよ。準決勝の相手も軽くないなして、次が決勝戦です。

さて、ナギ対詠春ですね…しっかり見ておきましょうか。

ナギはフットワークをいかして詠春の懐に潜ろうとします。が、詠春は野太刀を振るって追い払い、そのまま神鳴流を決めようとしています。あれは…斬空閃でしたか？

あ、ナギが障壁で防ぎました。やっと防御を覚えましたか。

そんなやりとりがしばらく続きましたが、二人とも動きが止まりました。時間が押してるからお互いに威力の高い技で決めるつもりですかね…

台詞が無いですって？結構離れてるから声が聞こえないんですよ。

解説はもはや機能してないですし。どういふことか？いや「すごい」だの「派手」だのしかいってないのですよ。

おや？ナギはあんちよこ見てますね。読唇術で…何々？「ヘカトンタキス・カイ・キーリアキス・アストラ・プサトー！」って…

なんの事か分からない？日本語にします。「百重千重と重なりて、走れよ稲妻！」ですよ。

ナギは「千の雷」、詠春は「雷光剣」、2つがぶつかって煙が上がります。

ゆっくりと煙が晴れていきます。立っているのは…ナギでしたか。審判が10カウントとって、ナギの決勝進出が決まりました。

ナギが控室に戻ってきました。

「どーだ…勝って…やったぜ…」

息も切れ切れに話してきました。

「お疲れ様です。まあ良いじゃないですか。派手に壊したおかげで決勝は1時間後ですよ。」

「1時間あればなんとかなるぜ…絶対に勝ってやるからな！」

「私も負けるつもりは無いですよ？」

今はゆっくりと過ごしましょう。

「さあいよいよ麻帆良武道会も決勝戦！いままでハイレベルな戦いを見てきましたが、ここで終わるのが惜しいくらいです！さあ、決勝戦の選手を紹介しましょう！先ずは一人目、ユキ・スプリングフィールド選手です！」

私がリングに上ると歓声が上がります。

「いまだ10歳の女の子ながら、敵を瞬殺する実力は本物です！ま

ともな試合を見ていない気がします、この試合ではどうなるでしょうか！

では二人目です！ナギ・スプリングフィールド選手です！」

ナギがリングに上ると、同じように歓声が上がります。

「こちらも10歳の少年ですが、先程は素晴らしい試合を見せてくれました！それまでの相手はほぼ瞬殺、やはり実力は本物です！そして、この二人は双子なのです！双子同士の戦いのどちらに軍配が上がるのか！」

「本気でいきますよ？」

「当然だ！俺が倒して優勝するぜ！」

「威勢は良いですね。私も優勝を狙うので。」

「それでは、試合…開始！」

「『戦いの歌』！」

お互いに無詠唱での戦いの歌、一気に距離を詰めます。

拳を出して、受け流され、ナギが掌底。それは読んでますよ。

そのまま手首を掴み、放り投げます。

放り投げたところまで一気に瞬動、回し蹴りで叩き落とします。

「グッ！」

ナギは背中から叩きつけられました、身体強化もあってそこまでダメージは無さそうです。そのまま立ち上がりました。

「マンマンテロテロ…」

「！リラ・カ・マギカ・ラ・エレメンタ…」
呪文詠唱は予想外でした…すぐに始動キーを唱えます。

「来たれ雷精、風の精、雷を纏いて、吹きすさべ南洋の嵐！」

「来たれ氷精、闇の精、闇を従え、吹雪け常夜の冰雪！」

「『雷の暴風』！」

「『闇の吹雪』！」

ドオン！

「くっ…！『魔法の射手 連弾 光の10矢 水の10矢』！」

爆風で吹き飛ばされながらも、魔法の射手で反撃。雷の暴風は打ち消しきれなかったですからね…！

「うお！？お返しだ！『魔法の射手 連弾 雷の20矢』！」

ナギも黙ってやられるわけもなく、打ち返して来ました。最初の1、2発当たっただけ良しとしましょう。

チラツと残り時間を見ますが、もう2分もありません。ナギに目配せすると、すぐに理解してくれました。

「マンマンテロテロ…契約により、我に従え高殿の王、来たれ、巨神を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆」

「リラ・カ・マギカ・ラ・エレメンタ…契約により、我に従え炎の霸王、来たれ、浄化の炎、燃え盛る大剣、ほとばしれよ、ソドムを焼きし火と硫黄」

〜都合主義〜

SIDEユキ

どうも、ユキ・スプリングフィールドです。

えー…只今トルコのイスタンブール、魔法世界へのゲートポートです。

武道会が終わって、ナギと詠春が意気投合、その流れで『魔法世界に行こう！』って成りました。

まもなく準備が完了するはずですが……お？

巨大な魔法陣が現れました。いよいよ転送ですかね？…って私だけに魔法陣！？どういうこと！？

考えを巡らせるまもなく転移されました。

ガサッ

痛たた…えーっとここは森？何故に？Why？

混乱していると、ヒラヒラと一枚紙が落ちてきました。手にとってみます。

『どつじゃ？ネギまの世界を満喫しとるかの？といってもまだ大戦すら始まって無いんじゃがのう。』

今回はちよつとしたサービスじゃ。お主は『境界を操る程度の能力』の練習がまるで出来んかったじゃろう？そこでナギや詠春とは別に転移させてもらったぞい。

ただこれだけだとサービスにも何にもなっておらんじゃろうから、ダイオラマ魔法球を送つとくぞい。なんと外の1時間が中での1年になると言つものじゃ。

さらにお主が認めぬ限りは見ることも触れることも出来ん特別製じゃ！

もちろん中の環境は整えてあるぞ？食料は10年分はあるからの。職業は適当に探してくれの。

なお、この手紙は読み終えたら自動的に消滅するぞい。』

そのまま手紙は存在が薄くなり、消えてしまった。

ドサッ

目の前に落ちてきましたよ。魔法球。手のひらサイズ。

えーっと、状況を整理すると…

・ナギたちと別行動に

・魔法球（特別製）GET！

・職業は自分で探せ

ってことですか…

（……い……おい！）

「ふえっ!？」

いきなり声が聞こえました。なんなんでしょう…

（俺がわからねえのか？お前のいう「もう一人」だよ！）

（あ…あなたでしたか…びっくりしたんですよ？）

（何が「あなたでしたか」だよ…ったく、すっかり俺のこと忘れやがって…）

（いや、気にならなかったというか何というか…）

（正直に言えよ…忘れてたんだろ？いい加減俺も表にでるぞ？）

(わかりましたよ…暴れないでくださいね?)

(わーかってるよそのくらい。)

「ふう…久しぶりに表に出たぜ…」

(しょうがないでしょう…あなたが表に出る機会が無かったんですから…)

「お?こんなところに女のガキがいるぜ!」

「いいじゃねえか!身ぐるみ剥いて慰み物にしてやるうぜ!」

(ちょうどその機会がやって来たぜ)

(程ほどにしてくださいよ…)

ん?俺が誰か、だって?まあ後で説明するから待っていてくれ。

数は…5人。野盗の類か?

「だーれが好んで慰み物になるか。さっさと滅べ。『凍てつく氷枢』」
「!」

パキン!

氷付け…だが3人か。無詠唱なら上出来か?

「「なっ…」」

おーおー唾然としてやがる。まさか10歳のガキがこんな呪文使えるとは思ってなかったか？

俺は浮遊術を使って空中に飛び上がる。が、アイツらはポカーンとしてやがる。逆に腹がたつな。

「追ってこれねえとは情けねえなあ！ま、お前らはここで死ぬ運命さ！」

俺の名前は零崎雪織！てめえらのきく最後の人間の名だ！」

(リラ・カ・マギカ・ラ・エレメンタ おお地の底に眠る死者の宮殿よ、我らの下に姿を現せ)

頭の中で詠唱、このくらいは容易いもんだ。

「『冥府の石柱』！」

ドッ…ガガガガガ！

巨大な六角形の石柱が空洞を開けるように6本、閉じ込められたところにトドメの1本。そのまま下衆どもを押し潰した。ってゆーか

抵抗無しかよ。まあ抵抗してもどうにでもなったがな。

一分待ったけど反応なし、こりゃ死んだな。

「ハッ…ちよろいな。」

(え、えー……)

さてと、適当に暴れて気分も晴れたから説明しようか。

俺とユキは同一人物で別人格。平たく言えば二重人格だ。

転生前、ユキは性同一性障害だった。その結果イジメを受けた。

何度もイジメを受けているうちに、ユキは女としての人格を生み出して、それが主人格になったんだ。今思えばどんなリアケースだっ
て話だな。

んで、俺は半ば封じ込められたんだが、元々の人格は俺だ。何度も
呼び掛けると、ユキの精神と繋がった。

始めは会話ができるのがやっとだったが、その内に表に出る人格を
操作出来るようになった、って訳だ。

んで何だかんだで転生したんだが、ユキが俺のことをすっかり忘れ
てやがったから表に出るのが遅れた、って感じだな。

以上、説明終了！

（まあ…もう良いですよ。それにしても零崎名乗るってどうなんで
すか？）

（別に良いだろうが。まさに裏人格って感じで。）

（ハア…）

なんか溜め息ばっかだな。ま、原因は俺だけだな。

さてと、これからどうすっかな…

くく都合主義 part 2 (前書き)

ここでもくく都合主義が発動

〜ご都合主義 part2〜

SIDEユキ

「さあて…殺して解して並べて揃えて晒してやんよ！」

（どうも…只今裏人格のユキ・スプリングフィールドです。

あ、大戦が始まったので私は「泉野雪」と名乗っています。）

ズドオン！

（あれから魔法球の中で西洋魔法の修行を5年程。おかげで大抵の魔法は無詠唱で使えるようになりました。）

ガガガガガッ！

（その後は日本で神鳴流の修行。門外不出の『忒の太刀』も教えてもらいました。

どうやったのかですって？運が良かっただけなんです。）

ピキ…ピキ…

（何やら妖怪退治に失敗したのか今にも殺されそうになっていた子

供を助けたところ、青山家の一員だったんです。取り敢えず保護して本山に向かいました。」

バリイイイン！

（長に「なにか出来ることはないか？」と言われ、「神鳴流を教わりたい」と言つとOKが貰えたのです。約1年程で修めました。

それから再び魔法球にこもって、5年程威卦法の修行をしました。居合い拳もつかえますよ？）

「あーあ。零崎終了か。」

（只今の職業は主に依頼されて賞金首を狩ってます。エヴァ以外、主に雪織が。）

「さて、報告に行きますか。」

（あ、そうそう。雪織は魔法…スキマも応用して姿を変えています。髪や目の色は黒色に、んでもって黒いローブを羽織ってます。）

「スキマは…別にいいか。歩いていくか。」

(ちなみに得物は黒い鎌。これは魔法球レベルの金がかかっています。魔力や気やらを最も流しやすい金属で出来た特別製。同じように刀も作りました。)

「ただもう少し歯応えのあるやつでも良かったかな。」

(得物が鎌だから雪織は「漆黒の死神」なんて呼ばれてます。私ですか？私は特には何もしてないので二つ名なんかありませんよ。)

「そんな感じで俺たちは過ごしてる、って訳だ。」

(台詞とらないで下さいよ…まあ山程喋ったので後は雪織に任せます。)

んで、さっきの戦闘だが…『雷の暴風』、『魔法の射手 連弾 光の101矢』、『おわるせかい』の3つだ。

実は『おわるせかい』は二段構えなんだぜ？

「とこしえのやみ、えいえんのひょうが」までで凍結、そのあとに砕くまでが1つの魔法だ。『こおるせかい』の場合は永久凍結するまでが1つの魔法、ってことだ。

っと、説明している間に到着だ。

「依頼完了だ。」

「ふむ…これは報酬の5000ドラクマじゃ。それにしても見事な戦いぶりじゃったな。」

俺は取り残した場合金を一切受け取らない、絶対に後金にする、という二つの条件でいつも依頼を受けている。

依頼料は本来の手配金額の5割。希望すれば遺体現場につれていくことや、生け捕りも可にしている。その場合は手配金額の6割で依頼を受けている。

ちなみに指名手配されていない場合は依頼人に金額を決めてもらっている。

そのおかげか信用度はかなり高い。今回は依頼人が遠見の魔法が得意だったらしく、1から観察していたようだ。

「そりやどーも。次があつたら依頼してくれ。もっとも、いないかもしれないがな。」

俺は魔法世界を放浪している。理由はスキマ移動のためだ。

スキマ移動は一度見たことがある場合とない場合とで大きく難易度が変わる。

見たことがない場合は正確に座標を決める必要があるので、洞窟内等には開けないのだ。

適当に移動していると、新聞の記事が目に入った。「次の戦闘は『紅き翼』の参加か!?'」だと。

ちよつどいいか。あの愚弟ナキの顔と『紅き翼』の実力を見に行くかな。

く V S 『紅き翼』 く

SIDE ナギ

よう！ナギ・スプリングフィールドだ！

俺は今、『紅き翼』って名前のギルド？で戦争で活躍している魔法使いだ！

メンバーは俺、旧世界からついてきてる詠春、途中で仲間になったアルビレオ・イマに俺の師匠をしているゼクトの4人だ！

アルは「重力魔法」が使えるし、ゼクトは見た目はガキだけどすげえ強い！

で、今は何をしてるかっつーと、帝国側が撤退したら急に強い魔力を感じたから、そこに向かってる途中だ。

いままでで一番強く感じたから気になってるんだ。

「む…？」

お師匠がなんか気づいたみたいだ。俺も目をこらすと、なんか黒っぽい人間が見える。

近づいた途端、そいつは口を開いた。

「てめえらが『紅き翼』か？」

女みたいな声だな。

「ああそうだけ。お前は何なんだ？」

「俺が何者か、ねえ。その白いローブを着た男、アルビレオ・イマ。気づいているんじゃないか？」

「ええ…私の推測が正しければ。『漆黒の死神』、零崎雪織でしようか？」

「なんじゃと！あの賞金首を狩っているという奴か！？」

「大正解だ。今回は帝国側からの依頼でな。」「『紅き翼』の実力を見てこい」とのことだ。おっと、殺しは無し、って話だったがな。」

『漆黒の死神』って聞いたことねえけどなあ…

「じゃあお前は強いのか？」

「さあね。今回の目的はてめえらの実力を見ること。1対1がいいか、1対多がいいか、選べ。」

随分上から目線で腹が立つな。

「おっと、逃げるのは無しだぜ『サムライマスター』青山詠春。もし背中を見せたら…」

いない！？

「こいつは御陀仏だ。」

声の聞こえた方を向くと、アルの首に大鎌が添えてあった。できる

なコイツ…

「さて、どうする？」

「いいぜ。1対1でやってやるっじゃねえか。」

「ふうん…じゃ、順番は俺が決める。アルビレオ・イマ、青山詠春、ゼクト、ナギ・スプリングフィールドの順だ。途中で手出しするなよ？」

「仕方あるまい…いったん離れるぞ。」

お師匠と詠春、俺は二人から離れる。するとアイツもアルから離れた。

「ヒヤヒヤしましたよ…死ぬかと思いました。」

「俺は殺すなどは言われたが、根本が達成できそうにないなら手段は選ばん。精々あがけよ？」魔法の射手 連弾 闇の101矢」

SIDEユキ

一気に魔法の射手が向かう。

「はっ！」

黒い球体…重力球か。まああれくらいなら普通に落とせるよな。

んでもって俺の方に飛ばしてきた。

「あらよつと」

ま、俺も使えるんだがな。重力球にたいして重力球をぶつけてかき消す。

そのまま虚空瞬動で懐に入る。

「『闇の吹雪』」

お？障壁はったか。とはいえほぼゼロ距離攻撃は効いたみたいだ。フラフラしてるし俺を見失ったか。

「『魔法の射手 戒めの風矢』」

「くっ…！」

命中、束縛成功。後は降参させるだけ。

「リラ・カ・マギカ・ラ・エレメンタ…」 おお地の底に眠る死者の宮殿よ、我らの下に姿を現せ”」

掌は上に向けて

「『冥府の石柱』 つと…どうだ？降参か？」

「…無理ですね。降参です。」

ま、今の間に首を刈れば人生が終わってたからな。当然と言えば当然か。

「まずは一勝。次だ。」

すべての魔法を解除。次にやって来たのは詠春。

「俺は殺さないが、おまえらは殺す気で来ていいんだぜ？」

影のゲートを利用して刀を取り出す。

「先手は譲ってやる。来な。」

「なら遠慮なく行くぞ。神鳴流決戦奥義！真・雷光剣！」

バカでかい気の雷が落ちる。が、結界で防ぐ。ってか一回打って動き止めたら無意味だろ。

「どうした？この程度か？」

無傷だし、挑発してやる。

「ならば！神鳴流奥義！斬魔剣 弐の太刀！！」

「神鳴流奥義。斬魔剣 弐の太刀」

弐の太刀は弐の太刀をぶつけることで相殺が出来る。

「なっ！？」

ま、どういう技か知ってるから防ぐことも出来るけどね。

縮地で詠春の真後ろに移動。

「考え事する暇があるのか？神鳴流奥義 斬岩剣 弐の太刀」

おもいつきり横薙ぎに振る。わざとだが。それをなんとか避けて、詠春が斬りかかってきた。防ぐようにして、そのまま鏝迫り合いに。

「何故貴様が神鳴流を使える…！」

「自分で考えな。っと！」

わざと力を緩め、体制が崩れたところで鳩尾に掌底。

「グフツ！」

「神鳴流奥義 雷鳴剣」

吹っ飛んだところに雷鳴剣、そのまま直撃。これより威力あげたら死ぬからな。

一気に移動して詠春を掴み、アルに向かって放り投げる。

「軽度の全身火傷。適当に治療しとけ。次」

ゼクトか…戦法は無詠唱の中火力魔法の連発だったか？

「お主は出来るようじゃからの…油断はせんぞ！」

「おっと！」

いきなり飛んできたのは熱線。『燃える天空』 かよ。かと思えば次構えてるし。

「『雷の暴風』！」

「『闇の吹雪』！」

相殺、爆煙が上がるが正直なところ油断は出来ない。というわけで

「『冥府の石柱』！」

ところ構わず石柱投擲。さて…

「む…『最強防護』！」

当たり。声が聞こえれば位置は分かる。一気に瞬動で後ろに移動。

「…『障壁突破 雷の斧』」

「な…ぐっ！」

もろに命中。まあ死なない程度に威力は調節してある。

（『斬魔剣 弐の太刀』だったら死んでますしね。）

（なにしてたんだ？今の今まで黙って。）

（ちよつとした精神統一ですよ。）

「『魔法の射手 戒めの風矢』」

んで拘束。そのまま鎌を突き付ける。

「これにて終了、か？」

「じゃの…手も足もでんわい。」

というかこの状況から反撃出来る人がいたら見てみたいもんだ。

（その前にあなたは首を落としてるでしょう？）

（まあな。）

「さて…最後。ナギ・スプリングフィールド。てめえだ。」

「はっ…今までの仇、返してやるぜ!」

「出来るんならやってみな。」

「行くぜ!『雷の暴風』!」

結界を張って受け止める。

「…か術式適当だな…バカみたいな魔力で強引に発動してるだけだろ?」

「(ムラがかなりありますしね。この際実力差をはっきりさせてはどうですか?)」

(だな。)

影のゲートでナギの真後ろに転移。

「ねえ。」

「なん…ブヘッ!」

「ただ単に殴っただけです。あ、雪ですよ?ゲートの時に入れ替わりました。」

「あなたが打てる中で一番威力が高い技を打ってください。相殺してあげます。」

「な!いったなてめえ!やってやるうじゃねーか!」

ブツブツと唱えています。『千の雷』以外あり得ないわけですが。

「行くぜ！『千の雷』！！」

「『雷の暴風』」

普通なら『雷の暴風』はかき消され、『千の雷』が私に直撃しますが、

「なっ！？」

魔法陣見て威力が薄くなるところを計算して打ちました。結果、相殺してお互いの魔法が消えました。

今度は瞬動で移動、刀を首に突きつけます。

「弱い。」

「くっ……」

かくして、『紅き翼』との戦闘は私と雪織の勝利に終わりました。

さて、事情を説明しますかね……

くVS『紅き翼』く（後書き）

戦闘です…が正直上手く書けません…
なにかアドバイ스가あればお願いします！

それからアンケートです。

今は大戦期なわけですが、そのうち原作本編に入ります。そこで、
麻帆良でのユキの立場をアンケートしたいと思います。

- 1 教師
 - 2 女子寮管理人
 - 3 喫茶店などの店主
- 以上の3つから選んで下さい。
一人一票でお願いします。

期限はユキが麻帆良につくまで！結構時間があります。

くTHE・説明く（前書き）

アンケート実施中です！

ユキの麻帆良での立場について。

- 1 教師
- 2 女子寮管理人
- 3 喫茶店などの店主

以上の三つから選んでください！

〈THE・説明〉

SIDEユキ

「ま、実力も分かったことですし。ネタばらしとしましょうか。」

「は？」

私はフードを外し、長い髪を外に出す。ナギと同じ、赤毛の髪。

「な…な…な…な…」

呆然として声が出てませんね。当然と言えばそうですが。

「さて、ナギ・スプリングフィールド。私は誰でしょう？」

「ユキ…なのか…？」

まるであり得ない物を見たかのような表情。

「ええ、その通り。私はユキ・スプリングフィールド。あなたの双子の姉ですよ。」

「グスツ…良かった…もう5年以上も経って…戦争が始まって…ズズツ…ずっと会えねえのかと思って…」

あらあら…泣き出しましたか。

「ご免なさい。辛かったでしょう？だから良いのよ？強がらなくて。」

「
ふんわりと優しく抱き締める。」

「だから今はお姉ちゃんに甘えて？大丈夫。顔は見えないから。」

「う…ああああ！」

「数十分後、『紅き翼』基地にて」

「さて…説明してもらえますか？」

「そう切り出したのはアルビレオ・イマ。」

「ちなみにナギは隅っこで膝を抱えています。恥ずかしかったんでしようね。」

「ええ。私はユキ・スプリングフィールド。先ほどの会話通り、ナギの双子の姉です。」

「では、ナギが『会えない』と言ったのは何故でしょうか？」

「5、6年ほど前に、ゲートポート関連の事故がありませんでしたか？」

「いえ、そのような話は聞いたことありませんが…」

「とすると揉み消されたのでしょうか…私はナギ、詠春と一緒に魔法世界を回るつもりでした。」

「つまり、とは？」

「何が起こったのかは分かりませんが、私は転移の際、全く知らない森に飛ばされました。」

このあたりから嘘ばかりになります。正直仕方ありません。

「とは言えここは魔法世界のどこかだろう、そう思って散策していると誰かは忘れましたが、賞金首に会いました。」

襲われそうになったので私は反撃しました。幸い私の実力を見誤ったソイツを無力化することが出来ました。

で、どうしようかと考えているとどこからともなく人がやって来ました。説明を聞いて、ソイツが賞金首であることを知りました。

お陰で私は身に余るほどの大金を手に入れましたが、さすがに持ち運びが大変です。というわけで大半を使って24倍ダイオラマ魔法球につき込みました。」

「なんとというか…無茶苦茶ですね。」

「まったくですね。自分でも信じられない位です。まあ、かなりの金額があまりりましたが、生きるためには働いて金を稼ぐことが必要です。」

とはいっても10歳の体ではほとんどにも出来ません。というかさせてもらえません。そこでかなりの年数魔法球に閉じ籠りました。」

「食料はどうしたんじゃ？」

「最初に大量にお金を払ったのでなんとかなりました。で、魔法球の中ではひたすら魔法研究に取り組みました。」

そしてある日のことですが、研究中の魔法を暴発させてしまいました。その結果としてですが、もう一人の私である雪織が生まれ、不老になり、さらにはこんなことが出来るようになりました。」

「うおっ!?!」

スキマで詠春の前に手首から先だけ出してみました。予想以上の驚きっぷりですね。

「魔力などは一切感じんかったが、空間操作かの?」

「いや、これだけ見るとそうですが。詠春、水の入った容器はありますか?」

「なんに使うのかは知らんが…ほら。」

キャッチして弄ってリリース。

「熱っ!?!」

「概念操作とでも言いますか。言うならば『境界を操る程度の能力』が手に入りました。」

「チートですか…ところで何故『程度』とつけているのですか?」

「出来る範囲が限られてるみたいですし。後は気分です。」

まあチート以外の何物でもないですけどね。

「そうですか。」

「で、雪織が賞金首狩りを始めたんです。姿は私と区別をつけるために髪と目の色を黒色にしていますが。」

「では俺からだが。何故神鳴流を使えるんだ？それも忒の太刀まで。」

「あー…『泉野雪』って知ってますか？」

「うん？いつぞやに連絡があったな。1年で神鳴流を修めたとか。」

「それ、私です。」

「なんだと!?!」

「簡単に言うと暇潰しで京都に来てた時に青山家の人を助けた見返りとして教わりました。」

「そ、そうか…それで忒の太刀まで使えるのか…」

「どこか納得いかない様子の詠春。ですが事実なので諦めて下さい。」

「お主の力では何が出来るのかの?」

「『境界』に関係する事象があれば大抵のことは出来ます。というか何が出来て何が出来ないかは正確に把握してません。」

屁理屈でもいいから境界を作れば弄れますし。死者蘇生と時間操作は出来ませんでしたか。」

「んでユキは『紅き翼』に入るのか？」

お、ナギ復活。

「ええ、入りましょうか。」

こうして私は『紅き翼』に参加することになりました。

その後皆に私は『ユキ・スプリングフィールド』と名乗らず、『泉野雪』として名乗ることや雪織の性格や事情等を説明しました。

本名を言わない理由は「なんか嫌な予感がするから」とだけ言いました。まあ雪織が日本名なのもありますしね。

さて、戦争に介入していきますか。

「グレートブリッジ奪還作戦」(前書き)

アンケート実施中です。

ユキの麻帆良での立場について。

- 1 教師
- 2 女子寮管理人
- 3 喫茶店などの店主

以上の三つから選んでください！

くグレート＝ブリッジ奪還作戦く

SIDEユキ

「は？グレート＝ブリッジが落とされた？」

「ええ、そうなんです。」

どうも、泉野雪です。

私が『紅き翼』に参加してはや数ヶ月、あれから新たにジャック・ラカンが仲間になりました。

そして過ごしてきたところにこの一報。原作知識がなければ啞然とする以外にできそうにありませんでした。

アレの守りの固さは見ただけで分かるほどでしたから。

「一体何があつたんですか？アレが落とされるなんてそうそう考えられません。」

「大規模転移魔法による不意討ちだそうじゃ。それで指揮系統が狂つたんじゃないの。」

「で、その手紙はつまり私たちにグレート＝ブリッジを奪還せよ、つてことが言いたいわけですね？」

「まさしくその通りです。」

「よっしゃあ！さっさと行ってちゃっちやと奪還だ！」

「おう！俺様も存分に暴れてやるぜ！」

「バカ二人は黙って下さい。作戦も無しに行くとか愚の骨頂でしょうが。」

アレの強みはブリッジを攻めれば上空から、上空を攻めればブリッジから攻撃できることですよね？」

「構造を見た限りではそうだろうな。とすると二手に別れるのが良いか？」

「ん〜そうでしょうね。上空担当とブリッジ担当に別けて攻略するのが良いでしょう。」

「では上空担当はラカンと雪がやるのが良いでしょうか？」

「妥当な線ですね。ラカンとナギを合わせたら化学反応起こして暴走しそうですし。ナギ、ゼクト、詠春、アルが4人で内部を攻略する、ということですね。」

「上空担当のお主ら二人がいかに上手くやるかじゃの。」

「その辺は任せて下さい。ハエ一匹たりとも逃さないようにして戦って見せましょう。」

「そーら、斬艦剣！」

いやはや。さすがラカンです。馬鹿デカイ剣を振り回して次々と戦艦を落としていきます。

私はブリッジと上空を完全に分断するように結界を張って攻撃をしています。ちなみに雪織はお休みです。

「『冥府の石柱』！『闇の吹雪』！」

私は戦艦に乗らずに突撃しようとするやつを中級 上級魔法で撃ち落としています。結界を維持する必要があるので、さすがに広域殲滅魔法は使えません。

「『紅き焰』！『雷の暴風』！」

つかさつさと撤退して欲しいですね。若しくはナギたちが早く奪還してもらいたいです。

「ははっ！さすがユキだな！じゃんじゃん無詠唱で唱えてやがる！」

「黙って下さいラカン！結界を維持するのは辛いんですよ！」

『ユキ！グレート＝ブリッジの奪還は成功だ！今からそっちにいくぜ！』

『ちよっ！待ちなs「ブツッ」…』

念話で成功報告の確認は良いんですが、こっちに来る必要は無いんですけどね…

「まあいいです！ラカン！適当に離れなさいよ！」

結界を解除して、呪文詠唱開始。

「契約により、我に従え光の皇帝、来れ、不滅の光、破邪の神槍、永久の輝きとなりて、降り注げよ光輝”！」

「あ、ヤベ！」

「『無幻の光槍』！」

カツ！ズガガガガガ！！！！

光系の広域殲滅魔法、無数の巨大な光の槍が降り注ぐ魔法です。『おわるせかい』等とは違い、確実性はほんの少し下がりますが威力は遥かに上回ります。

「ふいゝ危なかつたぜ。」

「離れるといたでしように。」

「聞こえなかつたんだぜ？お前の声が。」

「そうですね。まあ貴方なら大丈夫だと思いましたし。」

あ、帝国軍が引いていきます。さすがにアレで壊滅的なダメージを受けましたからね。

「いや、さすがに俺様でもお前の詠唱つきのアレは食らったら死ぬぜ。」

「おいユキー！って終わってるじゃねえか！」

そしてナギ登場。ゼクト、アル、詠春も一緒です。

「勝手に念話を切るからです。来る必要は無いと伝えようとしたんですがね。」

「まったくのう…少しは落ち着きを覚える馬鹿弟子が。」

グレート＝ブリッジの奪還後、私は『属性を統べる者』エレメンタルマスターという二つ名がつかしました。色んな属性魔法を打ってたからでしょうか？

後、ファンクラブが出来たそうです。以外と女性のファンが多いそうで…憧れでしょうか？

ただ、うわべだけを見るのは止めて欲しいですね。結局のところは人殺しですから…

くグレート＝ブリッジ奪還作戦く（後書き）

くオリジナル魔法く

『無幻の光槍』

詠唱

” 契約により、我に従え光の皇帝、来れ、不滅の光、破邪の神槍、永久の輝きとなりて、降り注げよ光輝” 『無幻の光槍』

説明

光属性の広域殲滅魔法。

上空から無数の光の槍が降り注ぐ魔法。

他の広域殲滅魔法と比べ、確実性はわずかに落ちるが、威力は他をはるかに上回る。

” 降り注げよ” を” 向かい射て” にすることで自身の回りから射つようにすることが出来る。

『完全なる世界』、そして反逆者に〜（前書き）

アンケート実施中です。

ユキの麻帆良での立場について

- 1 教師
- 2 女子寮管理人
- 3 喫茶店などの店主

以上の3つから選んで下さい。

『完全なる世界』、そして反逆者に

SIDEユキ

泉野雪です。

グレートブリッジを奪還して早数ヶ月、辺境に飛ばされたりなんだりするの分かってましたんで皆に事情を説明、雪織に本来の職業である賞金首狩りをさせてました

時々帰って来てみるといつのまにかガトウとタカミチ君が仲間になつてました。

取り敢えず自己紹介で『漆黒の死神』でもあることに驚かれました。

それから咸卦法と居合い拳使ったらまた驚かれました。ガトウは「まさか女性でやる人がいるとは…」、タカミチ君は「凄いです!」、他の人は「まあユキだからな。」という反応。

なんか最後の反応はムカつきましたよ。腹いせにラカンとナギをボコボコにしてやりました。二人から勝負を挑まれたんですよ?間違つても私からは手を出してません。

さて、そんなこんなでガトウから連絡があつて、本国の首都に来ています。

「んで、協力者つて誰なんだ?」

そこに歩いてくる男性…もとい

「マクゲル元老院議員！」

煩いですよ詠春。大声出さないで下さい。そもそも…

「いや、ワシちゃう。主賓はあちらのお方だ。」

前後の口調の差がひどいですね。ま、それはともかく。階段を上ってくるのは一人の女性。

「ウエスペルタイア王国…アリカ王女だ。」

美人ですね。いやはや。んで、横にいるナギを見るとボーっとします。アレですね。一目惚れってやつでしょう。

一人一人自己紹介。そしてラカンは「気安く話しかけるな、下衆が。」と言われました。

さて、私の番です。

「お初にお目にかかりますアリカ王女殿下。私は泉野雪と申します。」

「おお…そなたが『属性を統べる者』か。」

「そう呼ばれてはいますが、所詮は一人の人間です。どうぞ宜しく願います。」

会合が終わり、暇な時間です。が、

「ワツハハハハ！ 上手い事やりやがってこんガキヤア！」

「ああ！？ なんの話だよ！！」

「とぼけんじゃねーよ！ あのお姫様とイチヤイチャキヤイキヤイお喋りしてたろーが！この色男が！」

「なにがイチヤイチャだ、バカっ！ してねっつの！！」

「何言っただよ。俺なんか『気安く話しかける な、下衆が』だぜ〜〜？ いやーありゃイイ女だぜ。一本芯の通ったな」

「頭大丈夫かジャック？ マゾかあんた？俺あんなおつかねえ女、はじめて見たぞ？」

喧しい二人ですこと。ホントに。

「しかしよ、ウエスペルティアの王女ってこたーアレか？ 例の姫子ちゃんの姉君ってことかよ？」

「いや、姫子ちゃんの事はなんか、話しにくいみ たいだった」

「へえ？ なんでだよ？」

「知るかよ。俺だっけになっただっつーの」

成長障害や感情障害の薬漬けにして自分の家族を兵器として利用してるんですから。辛いはずが無いです。

ま、これについては黙っておきますが。

「今は協力を取り付けただけ良しとしましょう。それよりもこの戦争が伸ばされているように感じる理由です。」

「誰かによつて世界が滅ぼされようとしている、というアレですか。」

「荒唐無稽な話では無いからな。俺たちも調べてはいるが…」

「少し私は色々な場所を見て回つて来ます。あなたたちは別に調べてみて下さい。」

「了解だ。」

馬鹿二人はさつきまでのは何だったのか、また言い合いをしていますが。ヤレヤレですね。

よう、零崎雪織だ。

俺というイレギュラーのせいか、『完全なる世界』が見つかるのが遅れてしまった。ナギとアリカのデートが今日で、すでに出掛けてしまったようなのが残念なところだ。

「『コズモ・エンテレケイア完全なる世界』?」

「ああ。その組織がこの戦争を長引かせている存在だ。奴等も馬鹿じゃ無いのか、ヘラスやらアリアドネーやら、『紅き翼』では到底行けない場所であろうやく尻尾を掴めたぜ。」

「俺たちも帝国と連合がどこかで繋がっているという情報は入ったが…」

「ん、上々だ。どうやら中枢にまで奴等は入り込んでいるようだ。ガトウとタカミチはその方面から調べてみてくれ。それから…重大なのはこれだ。」

俺が取り出したのは一枚のレポート。そこには一枚の男の写真と、『完全なる世界』との結び付きを調べあげた文章。

「おいおい、コイツは今の執政官じゃねえか！MMのナンバー2まで奴等の手が入ってんのか!？」

「ソースは確かだが、確実な証拠が無い。周りには話すなよ？」

そしてナギがデートから帰ってきました。

今はクドクドと詠春が説教してます、が手元に一枚の紙を発見。

「ちょっと落ち着いて下さい詠春。ナギ、その紙は何ですか？」

「ん？これか？なんかアジトを荒らしてたら見つけたんだが…」

「ちょっと見せて！」

写りだす立体映像、そして語られる内容。まさに

「ビンゴ…！でかした！」

「え？何がだ？」

「後で説明します！コイツがあれば戦争は一気に終わらせれます！」
しかし私は焦り過ぎて、1つやることを忘れてしまっていました。

ガトウがマクゲル議員に連絡して、弾劾裁判の準備を進めることになりました。

そして法務員とマクゲル議員に会いに来たわけですが…

「法務員はまだいらっしやらないのですか？」

「法務員は…来られぬことになった。」

「は？」

ミスった！本物のマクゲル議員を保護するのを忘れていた！

「あれから少し考えたのだがね…折角の勝ち戦だ…ここに来て水を指すのも…どうかと思っただね」

「はあ…」

「私の考えでは無い。そう考える者が多いと」
「黙れ」

居合い抜きで躊躇わず首を狙う…が、手応えなし。幻影か…

「ちよっ…ユキ！お前何してるんだ！？」

「やられました…ナギは気づきましたか？」

「ああ。お前マクゲル議員じゃねえな。何もんだ？」

「気付かれたか…」

服が破れ、白髪 of 青年が姿を現す。

「なっ！？」

「よくわかったね、千の呪文の男に属性を統べる者。こんなに簡単に見破られるとは、もう少し研究が必要だね。」

トランシーバーを取りだそうとしたのを狙おうとしたが

「ぐう！」

どこから…？影のゲートか？

「わしだ！マクゲルだ！『紅き翼』から暗殺されそうになった！奴等は帝国のスパイだ！ああ、うむ！奴等の仲間もだ！今も狙われている！軍に連絡を…」

やられた。みればもう一人がラカンとナギの相手をしている。

「君達にはここで退場してもらおうよ。」

「本体は既に海の中、か…」

スキマを展開して強引に味方を全員基地に送る。

「覚えてなさい『1番目^{フリームム}』。私たちの誰かが潰してあげるわ……」

驚いたような顔を見てから、私もスキマで逃げる。

それから程なくして、『紅き翼』には反逆者のレットルが張られま
した。もっとも、

「昨日までの英雄が一転、反逆者か。ヌッフフ、人生は波乱万丈で
なくっちゃな」

この馬鹿^{ラカン}の思考は変わらないようですが。

『夜の迷宮』、救出（前書き）

アンケート実施中です。

ユキの麻帆良での立場は…

- 1 教師
- 2 女子寮管理人
- 3 喫茶店などの店主

以上の3つから選んで下さい。

『夜の迷宮』、救出

SIDEユキ

どうも、泉野雪です。

『紅き翼』が反逆者となって数日、ガトウ達と私の調査によって、アリカ王女とヘラス帝国のテオドラ皇女が『夜の迷宮』に閉じ込められていることが分かりました。

今は救助に向かうために作戦を考えているところです。

「そもそも雪の能力があれば容易く出来るんじゃないのか？」

たしかに詠春の言うことは分かります。ですが、

「無理です。」

「何故だ？」

「私の能力は移動に使う場合、座標の計算がいるんです。行ったところが無い場所である上に遺跡の中となると……」

「座標の計算、ですか？」

「ええ。あの能力の移動はほとんど転移魔法と変わりません。魔力が不要で詠唱も要りませんが。というか、そもそも二人がどこにいるのかが分かりませんし……」

「ふうむ…脱出には使えるのか？」

「ええ。それは可能です。」

「とすると、ナギとあなたで二人の救助、私たちは外からの敵を中に入れないようにする。こんなところでしょうか？」

「それが最適解でしょう。では、明日に備えましょうか。」

作戦当日です。今は『夜の迷宮』が見える位置で、結界を張って相手方に見えないようにしています。

「相変わらずお主の結界は反則じゃの…。」

「『見える』と『見えない』、その他もろもろの境界を弄って作ってますから。」

「入り口の見張りは2人ですか…どうしますか？」

「出来れば私たちの相手があの2人と内部にいる奴になるようにして欲しいですね…無駄な体力は使いたくありませんし。」

「とすると…私たちが別の場所から攻撃を仕掛けるのが良いでしょうね。出来るだけ派手にやればそちらに集まるでしょう。」

と、ゼクトが転移の魔法陣を書いていますね。

「これで完成じゃ。今とは反対の位置、高度100メートルの場所

「じゃの。」

私とナギ以外の四人が魔法陣に乗ります。

「では、派手にやって下さいよ?」

「おう!まかせときな!」

「では…転移」

四人の姿が魔法陣と共に消えました。

ズ…ズン……

直後、ここからでも肉眼で見えるほどの巨大な剣が出現しました。

「うっひゃー!派手だな!」

「ラカンの『千の顔を持つ英雄』、斬艦剣ですね。では、こちらも行きますよナギ」

「おうよ!」

結界を解除。瞬間見張りの二人が気づきました。

「チッ!向こうは囷だったか!」

飛んできたのは魔法の射手。ですがこの程度無問題です。

「『雷の投擲』!」

「咸卦法…居合い拳！」

ナギの『雷の投擲』が一人の心臓に突き刺さり、私の居合い拳がもう一人の首を折りました。

二人の息が無いのを横目で確認しつつ、中に突入です。

突入して早一時間、っていうかここ広すぎです！

「侵入者だ！」

「食い止め…」

パスッ

言い終わる前に刀で首を落としました。

「ひでえなお前…」

「聞く必要の無いことは聞きません。」

女王達の場所はこここの中心部、もとい最深部だそうです。っていうかそう叫びながら襲いかかってきた馬鹿がいましたから。

「せめて苦しめないようにしてあげてるんですよ………斬岩剣！」

ガラガラと音を立てながら壁が崩れますが、

「また外れ…いい加減にして欲しいですね………」

「そうだな…オラア！」
ドゴオン！

ナギが走り、魔力で強化した拳で壁を殴りました。煙が晴れていきます。人影…！

「来たぜ、姫さん。」

「遅いぞ、我が騎士よ。」

「はあ…ようやく見つけられました。テオドラ皇女は？」

「ゲホツゲホツ…妾はここじゃ！」

半ば瓦礫に埋もれるようになっているテオドラ皇女発見。
手をつかんで引っ張り出します。

「お主らは『紅き翼』かの？」

「ええ。私は泉野雪です。」

「なんと！お主が『属性を統べる者』か！」

「ええ。そうです。今はとりあえず脱出しますよ。」

そう言ってスキマを地上に開く。

「「な、なんじゃこれは！？」」

あ、初めてみればこうなりますよね…なんたって目玉だらけですもの。

「ナギ、アリカ王女とテオドラ皇女を連れて飛び込んで下さい。外に繋がってます。」

「ユキはどーすんだ？」

「私は外にいる詠春達に伝えます。振動も聞こえないですし、終わってるでしょう。」

「そうか。じゃあ先に行ってるぜ！」

そのままナギは二人を連れて飛び込みました。テオドラ皇女が「イヤじゃ〜！」

って言うてましたけど大丈夫でしょう。

私はスキマを別に開いて、その中に入ります。

スキマの中で状況確認…あれ？敵兵の増軍？仕方ありませんか。

「おわ！ユキ！」

「ラカン？とりあえず食い止めて。派手なので決めるから。」

呪文詠唱開始です。

「”契約により、我に従え風の帝王、来れ、全てを切り裂く不可視の刃、地を海を空を走りて、巻き起これよ旋風”！」

「イカン！離れるぞ！」

「『裁きの竜巻』！」

横向きに巨大な竜巻を打ち出すこの魔法。下手に属性魔法を打てばそのまま飲み込んで威力を上げ、そうでなくても大量の真空刃が飛んでいく、風属性の広域殲滅魔法です。

「ふう…」

「やりすぎじゃ。」

ゼクトに文句を言われましたが、適当に流しました。

その後はナギ達と合流、私たちは秘密基地に向かいました。

↳ 『夜の迷宮』、救出↳（後書き）

オリジナル魔法

『裁きの竜巻』

詠唱

” 契約により、我に従え風の帝王、来れ、全てを切り裂く不可視の刃、地を海を空を走りて、巻き起これよ旋風” 『裁きの竜巻』

風属性の広域殲滅魔法。

横向きの巨大な竜巻を打ち出す。弱い属性魔法は飲み込んで威力を上げる特徴を持ち、味方による強化も可能。

竜巻の内部は大量の真空刃が飛び交っているため、当たった物はあつという間にズタズタにされ、塵になる。

真空刃によって切れない物はほとんど存在しない。ダイヤモンドでも真つ二つにしてしまう。

『紅き翼』基地にて（前書き）

アンケート実施中です。

ユキの麻帆良での立場は…

- 1 教師
- 2 女子寮管理人
- 3 喫茶店などの店主

以上の3つから選んで下さい。

『紅き翼』基地にて

SIDEユキ

さて、アリカ王女とテオドラ皇女を救出し、秘密基地に戻って来ました。

「何だ、『紅き翼』の秘密基地とはどんなところかと思えば、掘立小屋ではないか！」

「逃亡者に何を期待してんだよこのジャリは。」

「何だ貴様！無礼であろう！」

「へっへっん。生憎ヘラス皇族には貸しはあっても借りはないんでね。」

「何い？貴様何者だ！」

とまあ騒ぐ二人がいるわけですよ。

ただテオドラ皇女はまだ幼いので、どうもラカンがからかっているようにしか見えないのですが…

（いや、実際そうだよ。）

（おや久しぶりですね雪織。）

（てめえがずっと表に出ていたからだろうが…暇なんだよ俺は。）

(そうですか。まあ後でちょこつとやっつてあげますよ。)

そしてナギの方を見ると、アリカ王女と話しています。

「じゃが…主と主の『紅き翼』は無敵なんじゃろ？」

そして聞こえてきた会話。これは見ないと。

「世界全てが敵、良いではないか。こちらの兵はたったの8人、じやが最強の8人じゃ。」

「へっ…」

「ならば我らが世界を救おう。我が騎士ナギよ、我が楯となり、剣となれ。」

「やれやれ…相変わらずおっかねえ姫さんだぜ…」

ナギがアリカ王女の前に跪きます。やっぱり様になりますね。

「いいぜ姫さん。俺の杖と翼、あんたに預けよう。」

原作での名シーン、やはり立ち会えるのは嬉しいですね。

「さてと…ナギがアリカ王女に忠誠を誓ったことですし、私も正体を明かしましょうか…」

「なんじゃ？」

「私は泉野雪、『属性を統べる者』。それであると同時に…」

黒いローブを羽織り、同時に魔法を使って姿を変える。

「零崎雪織、『漆黒の死神』でもあるのさ。」

おやあ？突然の事についてこれてねえな。

「じゃ、じゃが『漆黒の死神』は鎌を持っているというぞ？どうなんじゃ？」

「鎌、かぁ。これのことか？」

「ひっ…」

おいおい…ただ出ただけでビビるなよ…まあ子供には恐ろしいか？

「それは…本物か？」

「ん？俺がどうこうじゃなくて、鎌が本物かどうかを聞くとはなあ。

ま、こいつは本物だぜ？魔法発動体でもあるしなあ。さあて…」

俺は二人にこの事を伝えるのもあったが、別にやりたいこともあるんだよ。

「久しぶりに派手にやりたくてなあ…ナギー！ラカン！」

「お？やんのか？」

「いいじゃねえか！久しぶりにやってやるっじゃねえの！」

「たまには強い奴とやりてえんだよ。良いか？」

「あたりめえじゃねえか！」

「俺たちはまだお前に勝ってないんだぜ？断るわけねえだろ？」

「ハハッ！じゃあやろうか！」

魔法球を取り出す。ちなみに時間差は24倍。

「こんなかでやるぞ。流石に外でやったらどうしようもならねえかな。」

S I D E ア ル

突然雪織がナギとラカンの二人に勝負を仕掛けました。

私としても興味があつたので、魔法球に同行させてもらいました。ちなみにタカミチ少年と一緒にきています。ハイレベルな戦いを見るのも良い経験になるでしょう、とは思ったのですが…

「ラカン・インパクトオ！」

「『雷の暴風』！」

「ハハハハ！どうした？その程度か！」

バキ！ドゴオン！

どうもあの三人は周りへの被害を考えないようで、大量に流れ弾が

飛んできます。タカミチ少年はそれを避けるのに精一杯のようです。かく言う私も重力魔法を使って流れ弾を落としているわけですが…
とつか雪織は規格外にも程があります。今だって二人の攻撃を無詠唱の『冥府の石柱』で受け止めましたし…おかげで岩が大量に降ってきましたよ。

「『燃える天空』！」
「『ちよっ！』」

ズドオン！

「だぁー！てめえ雪織！殺す気か！？」

「この程度で死ぬタマじゃねえだろ！そうらもう一発！」

ズドオン！

いや、思わず突っ込みたくなりますね。広域殲滅魔法を躊躇なく打ち込む精神には、ですよ？

無詠唱とか魔力量についてはもう気にしないことにしています。あと適性属性についても。

彼女の適性属性を調べたら全てに適性がありましたよ。広域殲滅魔法は適性がないと使えませんが、彼女は全属性の広域殲滅魔法が使えますから…

なんというか、理不尽に思えるくらいです。バグとかチートとかで収まるんでしょうか？

そういえばすっかり忘れていた事がありますね。この戦闘が終わったら、『半生の書』に記録させてもらいましょうか。

SIDEユキ

きっかり一日を魔法球の中で過ごして、外に出ました。ああ、そう言えば突然神様から手紙が来ましたよ。内容は

「アルビレオ・イマの『半生の書』については、お主が事情を説明したように載るぞ。お主が転生者であると言えば真実が載るように手を加えたぞい。」

このくらいのサービスはしとかんどの。それじゃ、元気での。」

という物でした。この手紙を読み終えた直後にアルから『半生の書』に載せても良いか聞かれたので快諾しておきました。

あ、勝負の結果ですか？雪織が勝ちました。といか途中からスキマを使って理不尽な攻撃をしていましたからね…

そして今は

「ん〜もうちょっと魔力を多くしてみてください？」

「ハイ…この位ですか？」

タカミチ少年を鍛えているところです。

機能の戦闘が終わってから、物凄くキラキラした目で

「僕を鍛えて下さい！」

って言われたんです…断るのもアレでしたので。

「もう少し…もう少し…ストップ！その感覚よ。」

「ん…反発が凄いですけど…」

「一番反発が大きいつてことが魔力と気が同量だつて事を示してるのよ。」

「そうなんですか…でも何でそれが分かるんですか？」

「私も咸卦法を取得するために努力したからね。」

おかげで魔力や気の量についてはほぼ完璧に測定が出来ます。

「それで、咸卦法を成功させるには『自分を無にする』必要があるんだけど…」

「それは分かるんですけど、イマイチ感覚がつかめなくて…」

「いわゆる『無我の極地』ね。こればかりは上手く説明が出来ないからね…」

私は自分の中の境界を無くすことなんて楽にできますし。

「詠春と一緒に座禅を組むのが良いかしら？」

「座禅、ですか？」

「そう。アレは『無我の極地』に自分を追いやろうとする1つの方

法だからね。」

「そうですか…じゃあ今度一緒にやってみます。」

「うん。あ、あとは下手に他の事に手を出さないようにね。」

「どづい事ですか?」

これはまだタカミチ少年には分からないか。

「とりあえずタカミチ君はガトウさんを師匠にしているわけでしょう?だからまずは『無音拳』と『咸卦法』をマスターすること。下手に別の武術に手を出しても良いことは無いわ。」

「何故です?」

「うーん…簡単に言うと器用貧乏になる可能性が高いのよ。出来るだけ少ないことに集中して、極めるほうが強くなれる。私だって最初は魔法だけひたすら努力したのよ?」

「そうなんですか…分かりました!」

元氣よく返事をしてくれました。

ま、なんかタカミチが強くなるのがはやくなるかも知れないけど、良いですかね。

く『紅き翼』基地にてく（後書き）

タカミチ強化？

なんとというか中途半端な終わり方です…

〜決戦〜（前書き）

アンケート実施中です

ユキの麻帆良での立場は…

- 1 教師
- 2 女子寮管理人
- 3 喫茶室などの店主

以上の3つから選んで下さい。

〜決戦〜

SIDEユキ

どうも、泉野雪です。

前話からおよそ半年…え？メタ発言をするな、ですって？別に良いじゃないですかそのくらい。

ゴホン。それはともかく、この半年間はひたすらに暴れました。

『紅き翼』泉野雪として表から『完全なる世界』の手駒を潰し、『漆黒の死神』零崎雪織として裏から情報収集&mp;依頼という形でのやはり手駒潰し…抹殺って言うほうがしっくりきますけど。

そんなこんなで映画にして三部作、単行本にしておよそ14巻分の活躍劇を演じました。

そうこうしているうちにアスナ姫が捕まり、『完全なる世界』は準備完了、私たちは奴らを追い詰め、現在は『墓守り人の宮殿』に攻め混もうとしているということです。

「不気味なくらい静かだな、奴ら。」

「悪の組織なんてそんなものです。なめられているんでしょう。」

まあこんなときは静かになりますよ、普通。

「ナギ殿！帝国・連合・アリアドネー混成舞台の準備完了しました
」！
」

セラスさんが準備が整った事を伝えます。

「それで…あの…ナギ殿、雪様。」

「ん？」

「なんですか？」

「ササ、サインをお願いしても良いでしょうか？」

「うん？ああいいぜ。そのくらい。」

そう言ってナギはサラサラとサインを書き込みます。私もちゃちゃ
っと。

「あ、ありがとうございます…」

緊張感のない娘ですね…まあ良いですけど。

そしてガトウから連絡、どうやら正規軍は遅れるとのこと。説得は

間に合わないらしい。延長出来ないか聞いてきましたが、

「残念ですが、既にタイムリミットです。」

「ええ、彼らはもう『世界を無に帰す』儀式の準備は整っています。
『黄昏の姫巫女』は彼らの手中にあるのです。」

それを聞いて、ナギが飛び出そうとします。

「待つて。私は外の軍勢をあらかじめ潰してから行きます。だから露
払いくらいは。」

「なんかやんのか？」

「ええ。とびっきりの魔法を。」

そのまま宙に浮き上がり、準備開始。

「……………『燃える天空』術式固定……………『こおるせかい』術式固定……………
『千の雷』術式固定……………」

ぐ…流石に3つ、広域殲滅魔法を固定するのは辛いですね…

「術式連結……………完了！」

純粹な魔力でその3つを繋ぎ合わせます。形は三角形。

「行きます…『神々の黄昏』！」

打ち出し、一気に相手の軍勢の真ん中まで飛ばし…

「『解放』」

カツ！ズドオオオオン！

超広範囲に大爆発。衝撃はこちらに来ないように始めから術式を組んであります。

煙が晴れると、殆どの軍勢は跡形も無くなり、残っているわずかも重傷。ここまでやれば良いでしょう。

「このバグが…」

「努力の塊と言ってくださいな。」

「じゃあ皆、突っ込むぜ！」

ナギたちは『墓守り人の宮殿』に入っていました。

さあて、私は生き残った悪魔とかの殲滅をしますかね。私は刀を取り出して咸卦法を発動しました。

「ふう…このくらいでしょうか…ねっ！」

私は見える範囲の敵は全て斬り落としました。最後の一体を斬り捨てます。

ゾクッ

恐ろしい魔力…『造物主』か！

(ミスったな。)

(全くです。急ぎます。)

直ぐに『闇の魔法』を発動、両手で『千の雷』を掌握。

一気に雷化で移動。魔力の大きい方に向かいます。

(っ…)

(もうすぐだ。準備しとけ。)

(ええ。)

「ナギ！ゼクト！退いて！『解放・千の雷』×2！」

ズッドオオオン！

「ユキ！」

「私がいつまでも外に居るわけには、いかないんですよっ！」

ズドドドドド！

無詠唱『無幻の光槍』を打ち込む。いくら奴でも堪えるでしょ…

「ツク…フハハハハハ！」

笑い出した…雪織

(おう。演算開始だ。)

「私を倒すか人間！それもよからう！私を倒し英雄となれ！羊達の慰めにもなるう！」

腹のたつ物言いにたいして無言で『雷の投擲』を打ち込みますが、避ける素振りも見せずにくらいました。

「だがゆめゆめ忘れるでは無い！全てを満たす解は無い！いずれ彼等にも絶望の帳が降りる！貴様らとて例外では無い！」

「ぐだぐだ、うっさあああい（るっせええええ）！」

二人して造物主をぶん殴る。

「たとえ明日、世界が滅ぶと分かっても！それでも諦めないのが人間ってmondeshiyouが（だるうが）！」

「くっ…貴様らもいずれ知るだろっ…私の語る『永遠』こそが『全ての魂』を救い得る、唯一の次善解だと。」

「かはっ!？」

後ろから攻撃…ゼクトを乗っ取ったか…

「お師匠!？」

「自らに問うがいい。人は果たして救うに値するものか？」

(解析完了済みだ。やりな。)

「ゼクトから、離れろおおお!」

ゼクトをぶん殴り、造物主を引き剥がす。不滅の特性から、造物主は元の肉体に宿る。

「く…人間は度しがたい。英雄よ、貴様らも我が2600年の絶望を知るがよい…さらばだ。」

そう言って、造物主は異世界へと消えて行きました。

「お師匠!」

「っ…大丈夫でしょう…傷はついてない…気を失っているだけです

…」

強引にスキマを開き、送り返す。

「お、おい！」

ここからは私の領分…奥まで一気に進みます。

アスナは水晶のようなものに閉じ込められて居ました。

私は水晶に触れます。急に取り出して、悪影響が無いか確認するためです。

（ちっ…残念だが発動回避は無理だ。）

（やはりですか…仕方ありません…）

パキィィン！

内と外の境界を弄り、アスナを取り出します。それと同時に、アスナを閉じ込めていた水晶は砕けました。

ボウ…

「！」

(いよいよ発動か…さっさと逃げるぞ！)

(ええ…)

スキマを開き、アスナを抱えてそのまままた倒れこみました。

ドサッ

スキマから落ちたところに、『紅き翼』のメンバーたちは居ました…

「ユキ！」

「はは…演算のし過ぎ…です…少し寝かせて…くだ…さい…」

「お、おい！」

「アスナの…面倒を誰か…見ておいてください…」

それだけ言って、私の意識は闇に落ちました

〜決戦〜（後書き）

ゼクト生還。ユキ（作者）がしたかった原作ブレイクの1つです。

やはり微妙な終わりかた…アドバイスがあればお願いします！

オリジナル魔法

『神々の黄昏』

呪文等はとくに無し。

『燃える天空』『こおるせかい』『千の雷』の3つの魔法を固定、魔力によって連結させて打ち出す。

『解放』によって固定を外すことで、3つの魔法を同時に発動させる。

ユキはあらかじめ衝撃の範囲が広がりすぎないように術式を組み込んでいる。

威力については相乗効果によって測れないほど上がっている。いうならば『超広範囲殲滅魔法』

く目覚め、一時の別れく（前書き）

アンケート実施中です。

ユキの麻帆良での立場は…

- 1 教師
- 2 女子寮管理人
- 3 喫茶店などの店主

以上の3つから選んで下さい！

〜目覚め、一時の別れ〜

SIDEユキ

「ん……う……」

「ここは……ベッドの上……？」

「ユキ、起キタ？」

「アスナ……ちゃん……？」

「ウン。」

私を覗き込むように見るアスナ。えっと……何があった……？

私は確か『墓守り人の宮殿』でアスナを助け出して……そのまま皆のところへ移動して……

（そこで気絶したんだぜ。）

（ああ……そうでしたね。）

「今、誰か他の人はいる？」

「アルビレオ。」

アルが居るってことでしょうかね。

「呼んできてくれる？」

「ワカッタ。」

コクリと頷いて、トテトテといった感じで歩いて行きました。

(どのくらい寝ていたのでしょうか…)

(さあな。だが、嫌な予感しかしねえ。)

少し考えていると、アルがやって来ました。

「起きましたね…気分はどうですか？」

「まあまあです。寝起きですし。」

「それは良かったです。」

いつもの胡散臭い笑みではない、素直な微笑を見せるアル。

「さて…私が寝ていた間に何があったか説明していただけますか？」

アルの顔が曇りました。

「いずれは教えることですし…良いでしょう。アリカ王女が捕まりました。」

(やられたな…かなりの間気絶していたみたいだな。)

「……何が起こったか、最初から説明してください。」

「はい……あなたがアスナ姫をつれてきて気絶した後、『世界を無

に帰す』ための魔法が発動しました。これについては帝国・連合・アリアドネーが協力し、『大規模反転封印術式』を発動させることで『墓守り人の宮殿』ごと封印し、解決しました。」

「『大規模反転封印術式』ですって？そんなもの使ったら…」

「あなたの考えている通りです。その数日後、オスティアで終戦記念式典が行われ、お祭りムードの大騒ぎ。運悪くその時にオスティアで魔力消失現象が発生したのです。」

「アレは恐ろしい量の空気中に浮かぶ魔力を使います…そのしわ寄せがオスティアに向かったわけですね…空気中の魔力が消失した場合、浮遊している岩は落下するはずですよね？」

「その通りです。オスティアは崩落を始めました。これを解決する方々は見つからず、アリカ王女が『王家の魔力』を使用、オスティアは地上に不時着しました。」

「犠牲者を可能な限り減らす最善策ですね…これだけだと罪にはならない筈ですが？」

「ええ。問題だったのは、オスティア崩落が始まってからのアリカ王女の動きが早かったこと。結果として『完全なる世界』との結び付きをでっ上げられたんです。」

さらに同時にクーデターを起こした際の『父親殺し』の罪も被せられました。」

「『父親殺し』についてはアレが『完全なる世界』と結び付いていたというのに…MMのクスどもが…」

「……続けます。そうしてアリカ王女は捕らえられ、今はケルベラ
又無限監獄に居るはずです。」

「死刑囚専用の監獄かあ…執行までのタイムリミットは？」

「当初の発表では2年です。正確な日付などはまだ分かりませんが
……」

「ふうむ…今の『紅き翼』はアリカ王女に『一人でも多くの命を救
え』的なことを言われて実行中、ですか？」

「!……まさにその通りです。紛争地を巡り、巻き込まれた人たち
の治療をしています。」

「でもクルトは参加してないんじゃないの？彼の事だから、政治面
をどうにかしようと考えてるんじゃない？」

「よくわかりましたね…その通りですよ。あなたはどうするんです
か？」

「私は…基本単独行動でしょうね。少し裏でやっておきたいことも
ありますし……」

「そうですね…止めはしませんが、ホドホドにしてくださいよ？」

「まあもう暫くは休みますが。まだメンバーとも会ってませんし。」

さて、裏での仕事は何をしますかね…やっぱり残党潰しでしょうか？

「それですね…出来ればあなたにアスナ姫を預かって欲しいのですが？」

「はい？」

今、何て言ったこの人？

「大変なのはわかりますが…やはり男だけでこのような少女を育てるには無理がある、という結論が出ているんです。」

「はあ。」

「私としては非常に不本意ではあるのですが、もしあなたが単独で行動するのであればお願いします。」

この変態ロリコンが…幼女を手放す…だと…

「分かりました…預かりましょう。」

「ありがとうございます。」

「ワタシ、ユキニツイテイクノ？」

「そついでのことですよ。」

数日経つての夜です。

「そうか…ユキは一旦離れるのか…」

「私にも考えはありますし、『紅き翼』の一員であることを辞めるわけじゃありません。」

「アリカ王女についてはどうするのかの？」

「そのために動くんですよ。こういう場合独り身の方が楽です。まあアスナを連れていくわけですが、大丈夫ですよ。」

詠春とラカン、ガトウ、タカミチは既に酔いつぶれています。わりと静かなのはそのためです。アスナはとっくにおねむですしね。

「なあユキ…俺は何が出来るんだろうな…」

「ナギらしくも無い。何が出来るか、じゃなくて何をするのか、が大事なんですよ？あなたは頭もたいして良くないんだから、思うがままに動けば良いんです。」

「そうかあ…そうだよなあ…」

あらら？寝ちゃいましたか。慣れもしない酒なんか飲むからですよ。まったく…

とりあえず毛布をかけておきました。

「そう言えばユキはナギと今のうちに仮契約はしないのですか？」

「ブツ！ゲホツゲホツ！」

コイツは…

「いきなり何を言い出すかと思えば…私は血の契約の陣も魔力宝石の陣も、魔力を流し込むだけの陣も書けますよ？果ては偽名のまま仮契約出来てなおかつ本契約並みのアーティファクトが使える陣も作りましたよ？」

「それなら良いじゃないですか？」

「あなた分かっていつてるでしょう？対象者が寝ていても使えるのは、キスの陣だけだ、ってこと。」

「バレてましたか…」

「ナギの始めて唇を奪っていいのは彼女だけですよ……それに、私はアーティファクトは必要無いですし。」

「んゝ残念です。」

なんというか、締まらないなあ。

「さて、それでは私は離れますね。」

「マタネ、ミンナ。」

「おう！気を付けてな！」

「次に会う日を楽しみにしてて下さい！」

「アスナ姫のこと、頼んだぞ。」

「また会える日を楽しみにしてるぞ。」

「ワシもじゃ。達者での。」

「次にアスナ姫と会える日を楽しみにしておきますよ。」

「次会うときは、絶対にお前に勝ってやるからな！」

さて、暫くの別れです。

魔法も使ってアスナを杖から離れないようにして。

「じゃあ、また会う日まで！」

一気に飛んでいきます。

さて、何処に行って何をしましょつかね。

〜目覚め、一時の別れ〜（後書き）

以下ネタバレ

一時の別れといっても次回には合流するんですけどね。
つまり次回は2年後のことになります。

くくルトとの通信く (前書き)

アンケート実施中です

ユキの麻帆良での立場は…

- 1 教師
- 2 女子寮管理人
- 3 喫茶店などの店主

以上の3つから選んで下さい。

くルトとの通信

SIDEユキ

よう。零崎雪織だ。

あれから別れて約2年、俺は『完全なる世界』の残党潰しを主にやっていたぜ。

たまには紛争地に出向いて治療とかもやっていたがな。

色々な場面をアスナに見せたことはいい方向に向かったみたいだ。感情も知識も育ってるからな。

アスナが魔法から離れることは絶対に出来ない。俺がその気になれば暫くは断絶出来るだろうが、それはまやかしだろう。

ただ、旅の途中いきなり『力が欲しい』って言われたのは驚いたがな。大方アスナ狙いの敵が何度も来てたからだろうが…

これについては「泉野雪」で仮契約をして、とりあえずある程度の体術をつけることで納得させておいた。

まだ体が成長してないのに筋肉つけると絶対に悪いからな…ただ、センスが良すぎるのは考え物だ。あつと言う間に身につけちゃった。咸卦法も完璧に使えるし…どうしよう？

あ、アーティファクトは『ハマノツルギ』だ。だが調べたら原作以上に上げつない効果を持っていた。

魔法無効化はそのままに、本人の意思で『反射』が使えるとか…何なんだよ！？どこの一方通行だよ！？
ついでに結界も張れるとかもつと意味不明だよ！？

対魔法使い最終兵器といってもおかしくない性能だ…成長して剣術覚えたらどうなるんだろ？いや、覚えさせるつもりだけど…

つと、そんなことを考えてたら通信だ。なんだ？

『もしもし…クルトです。』

「よう、雪織だ。久しぶりだな。」

『ええ、お久しぶりです…』

ん？何やら落ち込んでるな…とするとアレかな。

「どうした？暗い声だが…何か起こったか？」

『ハイ…アリカ様の処刑日が早まりました。今日から10日後です…それで…』

「アリカを助けて欲しい、と？『紅き翼』はどうしたんだ？」

『もちろん彼らにも連絡しましたよ。ですがいい返事を貰えなかったんです…』

ふーん…そんな風に捉えたか。

「へえ…面白いこと言うなあクルト。」

『面白いつてなに言ってるんですか!』

「いや、あいつらがどんなやつかまだわかってねえみたいだな、って思ってたな。」

『はい?』

「なーに、大丈夫だ。まさかあいつらが動かないとでも?それはあり得ねえ。一番近くで見てきた俺が言うんだ。」

『はあ…それでも僕は不安なんですよ…』

「ん〜だったら俺が行って発破かけてくるから安心しな。じゃな!」

『え?ちよ…待っ…』

バキン!

通信用魔法具を砕く。

「どうしたの?」

「ああ、クルトから連絡が来てな。アリカの処刑日が早まったらしい。で、ナギがウジウジしてるみたいだからな…」

「ナギたちの所に行くの?」

「ああ。アリカを助けるためにも、な。」

「姉さまを助けてくれるの？ユキオリ。」

「ん？今まで助けなかったから不思議に思ったのか？」

「うん。」

「えーつとだな、アリカは『災厄の魔女』って呼ばれているのは言
つたよな？」

「言ったよ。でもユキオリなら直ぐに助けれたんじゃないの？」

「厳しいこと言うなあ…それだとアリカの命を救うことは出来るん
だが、名誉は救えないんだ。」

「？」

首を傾げるアスナ。可愛いな。

「お前もアリカが『災厄の魔女』なんて呼ばれるのは嫌だろ？何か
したならともかく、何もしてないのにさ。」

「うん。」

「だから名誉を取り戻すために、時間をかけて調べあげた。アリカ
を無罪にして、なおかつ自由にするためにな。」

「つまり悪人を粛清するための情報を集めるのに時間がかかった、
ってわけ？」

「何でそこまで複雑に言えるんだか…まあそういうことだ。」

「でもさ、情報が集まっているんなら今でも出来るでしょ？つまりユキオリが面倒なんだよね？」

「う…なんつーか、そこまで頭が回るか。まあ確かに面倒なのもあるが、アリカの『気持ち』を救うための舞台がいるんだ。」

「姉さまの『気持ち』？」

「そ。絶望に立たされ、命を諦めた女性^{アリカ}を救い出す一人の英雄^{ナギ}。そのための舞台がな。」

「ユキとユキオリって演出家なの？」

「違うな。自動的にその舞台が整うんだ。利用しない手は無いだろ
うっ。」

「うーん…そういうものなの？」

「そういうものなのさ。」

さてと、メガロ近くの『紅き翼』の基地に行くか。

「よう、久しぶりだな。」

「うん？雪織ですか。久しぶりですね。」

まず出迎えたのはアル。

「久しぶり、アルビレオ。」

「これは久しぶりですねアスナちゃん。元気になりましたか？」

「うん。」

「まあいいや、とりあえず入らせてもらっせ。」

中に入ると、ナギ以外のメンバーは揃っていた。とりあえず挨拶をして、ナギはどうしたのかを聞くとウジウジと悩んでいるみたいだ。

「つーわけで個室の扉の前。まあやることは破壊なんだが。」

「バゴン！」

「よう、久しぶりに会おうかと思ってたらウジウジ悩んでーじゃねーよー！」

「……ああ、雪織か。」

「なんだなんだお前らしくも無い、何があったか言ってみな！」

するとポツポツと話し出すナギ。まあ言っちゃ悪いが悩むことでも何でも無いことだな。

「ふうん…で？」

「で？って何だよ…」

「お前は何かしたいのさ。俺が聞きたいのはそれだけだ。遮音魔法はかけてるから。」

「俺は…その…」

「ああもうじれったい！はっきりしやがれこの馬鹿！」
思考誘導の魔法をかけつつ叫ぶ。こうすれば…

「俺は大好きなアリカを助けたいんだよ！馬鹿っていうことねえだろ！」

「へえ…」

ニヤニヤと笑ってやる。見事に釣れたよ、しかも大物。

「なっ…何だよその顔…」

「『大好きなアリカ』ねえ…」

「なっ……………」

顔を真っ赤にして黙りこむナギ。

「お前がやりたいことは分かった。じゃあ皆に伝えるよ？俺たちは仲間だろっ？」

「で、でも…」

「いいから伝えやがれ！仲間に遠慮することはねえ！それとも俺がさっきの言葉を伝えようか？」

「分かったよ…伝えれば良いんだろ伝えれば…」

部屋の外に出る。

「皆、俺はアリカを助きたい！協力してくれるか？」

部屋が静まり返る。

「フフ…それで悩んでたんですね…」

「水くさいぞ、ナギ。」

「まさか俺たちが協力しないと思ったか？」

「相変わらずの馬鹿弟子じゃのう…」

「へっ…助けたいんなら始めからそう言いやがれってんだ！」

「僕も手伝います！」

「皆…ありがとうな！」

ナギの悩みは解消、脚本は用意済み。

あとは本番を待つだけ、だ。

く王女救出く（前書き）

アンケート実施中です。

ユキの麻帆良での立場は…

- 1 教師
- 2 女子寮管理人
- 3 喫茶店などの店主

以上の3つから選んで下さい。

〜王女救出〜

SIDEユキ

「魔獣うごめくケルベラス渓谷。魔法を一切使えぬその谷底は魔法使いにとってまさに死の谷」

処刑人が処刑内容を説明しています。

「見せしめ」の意味でもあるのでしょうか？

重罪人に対しての恐怖の誇示、ってやつですかね…

「歩け」

「触れるな下郎。言われずとも歩く。」

アリカ王女はゆっくりと、しかし確実に「死」へと向かうために歩きます。

そうしてたどり着いた飛び降り台。目を瞑り、

「ナギ…さらばじゃ…」

確かにそう言って、飛び降りていきました。

さあ、本番の始まりです。

「よーしっ！こんなもんだろ！」

「な、なんだ貴様！」

ラカンが処刑人の頭を鷲掴みにします。

「おっさん、今からここで起きたことは『なかった』ことになる。
いいな？」

「な、何を……」

「むんっ！」

ラカンが着ていた鎧が弾けました。中から気を膨らませた見たいです
ね。

「な……『紅き翼』の……ジャック・ラカンだと!？」

「まさか俺だけだと思ってるのか？」

そして現れる詠春、ゼクト、アル、ガトウ。

会場は騒然となり、元老院の議員たちは慌て出します。

「貴様ら……今さら何を!」

「何を？そりゃ決まってる。王女を助けたただけだ。『千の呪文の男』
、ナギ・スプリングフィールドがな。」

「ばかな!いかにあの『千の呪文の男』だろうと谷底からは生きて
帰れまい!」

「クククク…アハハハハハ！」

大笑いしたのは私。まさか何もしていないとでも？

「何だ貴様！」

「面白いと言いますねえ…死ぬのは、あなたたちですよ？」

「何を…」

「ほら。」

スキマ展開、見事に着地したのはアリカをお姫様抱っこしたナギ。

「ナギ・スプリングフィールド、アリカ・アナルキア・エンテオフ
ユシアはここにいる。」

大量のレポートを空中に浮かべる。

「これらはアリカ王女の無実を晴らし、そして」

さらにスキマ展開。無様に落ちてきたのは手足を縛られた真の罪人。

「あなたたちの有罪を証明するもの。」

次の瞬間、処刑執行人の大半が鎧を外す。

「お前たちを『完全なる世界』の関係者とみなし、今ここで処刑する。」

「馬鹿な…そんなはずは…」

私はニヤリと笑い、一言。

「あるんですよ。」

転移魔法を発動。罪人は全て谷のなかに、のこりの『紅き翼』以外の人達は安全地帯…もとい、それぞれの家に。

「茶番劇は終わり。さて…」

ナギとアリカの方を向く。

「プロポーズでもしたんでしょう？お互いに見つめ合って。」

「ハハハハ！こりゃ良いぜ！」

「めでたい事です。」

「馬鹿弟子にも春が来たんじゃないの？」

「なっ…」

「っ…」

おやおや、二人とも顔を真っ赤にして。

「ユキ。それくらいにしておっけ。そろそろ敵さんのお出ました。」

詠春に言われ、飛んでくる戦艦を見る。

「二人はイチャイチャしておいてくださいな。では…」

振り返り、告げる。

「のこりの屑どもを潰しますか。」

『おっ！』

S I D E o u t

S I D E クルト

僕は驚きました。

何に、というと『完全なる世界』の関係者を全て証拠つきで炙り出し、一斉に処刑するというアイデアを思い付いた事に。

そしてそれを実行するための資料を完全にそろえ、この舞台を作り上げたことに。

情報を操作し、かき集め、それでも僕がまだ出来なかった事をやりとげてしまったことに。

そして今、彼女は

「アハハハハハハ！」

恐ろしい笑い声をあげて戦艦を撃墜させていきます。

「ラカン適当に右パンチ！」

「神鳴流決戦奥義、真・雷光剣！」

「フフフ…」

「豪殺 居合い拳！」

「『雷の暴風』、『闇の吹雪』！」

他のメンバーも各々の方法で次々と敵を蹴散らしていきます。

「皆さん凄いなあ…」

「そつだなあ…」

タカミチの言葉に思わず返してしまいました。

僕もあの場所にまでたどり着けるのかな…

え？ナギさんとアリカ様？ああ…見たくないんですよ…だって…

「ナギ…」

「アリカ…」

名前呼び合っている上に凄まじいオーラが出ているんですよ…
顔が真っ赤になってしまいそうです…うっ…

S I D E o u t

S I D E ヌキ

さて、処刑日から数日、公式的にはアリカ王女は『処刑された』ことになりました。

ちなみに『紅き翼』と関係者以外で今回の事情を知る人たちの記憶は消しましたからね…悪いことはしたと思いますが、これについてはクルトに頑張ってもらいましょう。

さて、今は休んでいる訳ですが…

「これからどうしましょう?」

アリカ王女を表に出すことは出来ないことも無いですが、あまりしたくありません。

ちなみに今ここにいるメンバーは私、詠春、アスナという奇妙な感じです。

ナギとアリカもいるにはいますが、ずっとイチャイチャしてるんでカウントしてません。

「日本に行きたい。」

「え?」

まさかのアスナの発言。

「日本、かぁ…どうします?」

「え?俺に聞いたのか?」

「そうですね?詠春には木乃葉さんもいるでしょう?」

「ああ…そう言えば帰ってないな…」

「木乃葉さんって、誰?」

「詠春の愛する人、ですよ?」

「う…まあそうなんだが…」

「じゃあ会ってみたい。」

「しかしだなあ…ゲートポートを抜けるのは…アリカ様かな…皆でいくつもりなんだろう?」

「そこは私がいますし無問題ですよ。皆に伝えてみます?」

「うゝむ…そうだな…出来ればそろそろ戻りたい気持ちもあるし…
そうするか。」

「じゃあ決定ですね。今日の夜にでも話してみましよう。」

「日本に行けるの?」

「まあ行けるでしょう。皆ノリは良いですし、期待していいと思い

ますよ？」

「うん。」

その夜、話すことで即時決定、場所は勿論京都です。
さて、京都ではどうなりますかね…

〜王女救出〜（後書き）

相変わらずうまく終わらせれない…
次回は京都が舞台です。

（京都到着）（前書き）

アンケート実施中です。

ユキの麻帆良での立場は…

- 1 教師
- 2 女子寮管理人
- 3 喫茶店などの店主

以上の3つから選んで下さい。

〜京都到着〜

SIDEユキ

「ここが、京都。」

「そうですね。もっとも、山の中ですけど。」

ハイ、というわけでやって来ました古都京都。

メンバーは私、アスナ、詠春、ナギ、アリカ、アル、ガトウ、タカミチ、ラカンです。

え？ラカンはゲートポートを使えないんじゃないか、ですって？

そうですね。だから私のスキマで移動したんです。座標さえ認識していればどこにでも行けるわけですから。

お金についてはガトウに頼んで調達してもらいましたけどね。

んで、今は詠春の実家もとい屋敷に向かっているわけです。

「それにしても面倒ですね。私も礼儀として結界の前に出ましたけど。」

「余計な侵入者を防ぐためだ。我慢してくれ。」

「身体強化の魔法やら転移魔法とかもただの魔法使いだと使えないようにしてありますし、階段も多いですし……」

「面倒。」

「う…」

「まあ、あの二人には関係無さそうですけど。」

後ろを向けば、イチヤイチャしているナギとアリカ。そして他のメンバーは顔をしかめています。

あ、今の位置関係を図にすると…

アスナ 私 詠春

この間およそ10m以上

ナギアリカ

この間およそ15m以上

アル ガトウ タカミチ ラカン ゼクト

といった感じです。

「姉さま、嬉しそう。」

「まあ幸せなのは結構ですが、ホドホドにして欲しいですね…」

あの美男美女カップルは人目も憚らずに路上キスとかしそうです。
「バカップルです。」

「っと…ぐちぐち言ったら見えてきましたね。」

大きな門が見えてきました、ようやく到着です。

しばらく待って、全員が門の前に来たところでぐぐります。

『お帰りなさいませ、詠春様、雪様!』

原作のあのシーンよろしく、大量の巫女さんがお出迎え。

「は…?」

私は苦笑しつつ、啞然としている詠春に話す。

「私が連絡しておいたんですよ。いつの間にか私も青山家か近衛家
に加えられたみたいですが。」

「ああ、そうか…」

横目で納得しきれない顔の詠春を見つつ、巫女の一人にたずねる。

「それで…木乃葉さんはどちらに?」

「木乃葉様でしたら…」

「詠春さ…ん!」

巫女が答える前に出てきましたよ、黒髪の大和撫子が。木之葉さんです。

そのまま詠春に向かって走っていき…

「の…バカー…！…！…！…！…！」

「ぐふう！？」

おお…見事なボディーブロー…気を纏った一撃をお見舞いして押し倒しました。

「詠春はん…あんさんはウチというものが有りながら…」

「こ、木乃葉…さん？」

「この赤毛の女の子は誰ですか？まさか雪はんとの子どもとでも言うつもりかいな。」

「は……？」

こちらを向いた木乃葉さん、しかしその目は笑っています。成る程…寸劇ですか…良いです。のってあげましょう。

「まさかそんなわけないだろ！？雪もちゃんと説明してくれ！」

という言葉に対して私は頬に両手を当てつつ顔を赤らめて

「そんな…あんなに激しかったのに…」

「ぶっ!？」

「どういうことか、ちゃんと説明してくれはります?」

真つ黒なオーラが出てますねえ…これが演技だというのが信じられないくらいです。

「詠春とユキはそんな関係じゃない。」

そこにさしのべられた救いの手、アスナ。

その瞬間、木乃葉さんのオーラは一瞬で消えました。

「ええ、分かってますえ。まさか詠春はんにそんな度胸はありません。」

「木乃葉…さん?」

「でもなあ…ウチも心配やったんやで?せめて一言でもいいから手紙くれたってええんやないの?」

「その…すまなかった。」

「さて、しょーもない寸劇に付き合ってくれておおきに。」

「いえいえ、私も楽しかったから良いですよ。」

啞然とする観客、途中まで昼ドラ的展開でしたし。

「改めまして、ウチは近衛木乃葉、詠春はんの妻になる予定です。よろしゅうな。あんさんらが『紅き翼』のメンバーやな？」

「ええ。アルビレオ・イマです。以後よろしくお願いします。」

「俺はナギ・スプリングフィールドだ。」

「アリカじゃ。」

「ジャック・ラカんだ。」

「アスナ。」

「ガトウ・カグラ・ヴァンテンバーグと言います。どうぞよろしく。」

「フィリウス・ゼクトじゃ。」

「高畑・T・タカミチです。」

とまあ自己紹介。アスナとアリカはもうウェスペルタティアから縁を切ったと言いたいのでしょうか？

「まあ立ち話も辛いやろうし、家に入ってゆっくりしてな。」

というわけで私たちは中に案内されましたとさ。

〜京都到着〜（後書き）

ネギまの漫画の中に「雪」という名の登場人物がいたことに今さら気づく…

まあ別に良いですよね！と開き直ってみたり。

とりあえず中途半端ですが今回はここまで。

以下ネタバレ

次回は両面宿讎を出すつもり…です。

〱両面宿讎、フルボッコ?〱(前書き)

アンケート実施中です。

ユキの麻帆良での立場は

- 1 教師
- 2 女子寮管理人
- 3 喫茶店などの店主

以上の3つのうちどれが良いか、選んで下さい。

く両面宿儺、フルボッコ？く

SIDEユキ

詠春の実家についてのんびり過ごし、今は夜。

「ガハハハ！ほら飲め飲め！」

「ちよっ…やめて下さいラカンさん！」

「ほらアリカ、あーん。」

「あーん。」

「…！ウチも、ほら詠春はん、あーん。」

「ちよっ…何を対抗しようとして…ぐむ。」

「平和ですねえ…」

「そっじゃのっ…」

「平和なのは良いこと。」

「そっだな、アスナちゃん。」

「ま、そっですよね。」

半分宴会に近い形になっています。

バカップル×2とラカン、タカミチが中で大騒ぎ、私、アル、ゼクト、ガトウ、アスナは縁側に腰かけてます。

「私は酒は苦手ですけど、どうです？日本酒の味は。」

「うん？まあまあだな。少し度が強いが。」

渋いおじ様が日本酒を飲むのは様になってますけどね。

「んゆ…」

アスナが私にもたれ掛かって来ました。

「もう眠い…」

「なら寝ても良いですよ。夜更かしは良くないですし。」

「分かった…」

膝枕をしてあげます。よほど眠かったのか、すぐに寝息が聞こえてきました。

「よっ…」

遮音用の結界を張りました。後ろで騒いでいるのが聞こえて途中で起きられても可哀想ですしね。

しばらく時間が経ちました。いや、月をぼんやりと見ていただけなので何分経ったのかは知りませんが。

と、結界に誰かが触れたようです。後ろを向くと、焦っている様子の詠春。

私は枕を出してアスナの頭の下に置いて、結界を狭めて外にでます。

「どうしました？」

「ああ、実はリヨウメンスクナの封印が解かれてしまったんだ。出来れば再封印の手助けをして欲しいんだ。」

「リヨウメンスクナって飛弾の大鬼神とか呼ばれてるやつですよね？何故京都に？」

「確か1600年ほど前に京都に封印されたらしい。何故かはよく覚えてないが…」

ま、これは気にしたら負けですし…

「良いですよ、手助けしましょう。」

「ありがたい。」

というわけでやって来ましたよ。ナギたちもやって来ましたけど、随分フラフラしてますね…酔ってるんですか？

「つーかでけえな！こいつ！」

「おもしれえじゃねえか！」

いや、何が面白いのかよく分かりませんよ？

「おっと…」

殴って来ましたが避けました。まだ封印が解かれて間もないのか、動きが鈍いですね。

「『雷の斧』！」

「ラカン・インパクト！」

ナギの打ち込んだ『雷の斧』で腕の一本が切れました。ってか斬れた腕が消滅ってどういうことでしょうね？

ラカン・インパクトで大きくふらついてますし…

「神鳴流決戦奥義！真・雷光剣！」

詠春の雷光剣でまた大きくふらつきました。うーん…私っているんでしょか？

「再封印したいから動きを止めてくれ！」

「わかったぜ！」

「おつよー！」

とか言いながらポコポコにしているのはどういふことでしょうか。動きが止まってないですよ？

まあ良いですけど…バカですし。動き止めるだけならアレが一番でしょう。

「ナギ、ラカン、巻き込まれても知らないですよ!」

「ああ!？」

「何だつて!？」

二人が吠えてますが、放っておいても大丈夫でしょう。

「リラ・カ・マジカ・ラ・エレメンタ!」契約に従い、我に従え、氷の女王、来れ、とこしえのやみ、えいえんのひょうが!」

「ちよつ!？」

「やべつ!？」

二人は詠唱を聞いて急いで範囲から脱出。そうでもしないと巻き込まれますし。

リョウメンスクナのいる範囲の空間を凍結させました。結果、とりあえず凍りましたが、まだ途中です。

「おい!あぶねーじゃねーか!」

「知りませんよ。動きを止めるのに最適な魔法を使っただけです。」

スクナのほうに向き直り、続きを再開。

「”全てのものを、妙なる氷牢に、閉じよ” 『こおるせかい』！」

そのまま氷柱封印魔法。これでスクナの氷付けの完成です。

「これで良いですか？」

「ああ。あとは本山の陰陽師に任せるようになってるからな。」

文句を言う二人は拘束して、スキマで部屋に落としておきました。

私と詠春は普通に帰ります。

「なんじゃったんじゃ？」

「神の一柱の封印が解かれて暴れそうだったので、動きを封じて再封印しました。」

「神？」

「ええ。両面宿儺という鬼神で、日本だと様々な形で伝承されています。ただ、私が見た限りで言うと鬼としての性質の強いものですが。」

「鬼としての性質の強いつてのはどういうことじゃ？」

「えーっと…両面宿儺はある伝承では民からの略奪を楽しむ、とされていてまた別の伝承では民のために別な鬼を討った、ともされて

いた…筈です。今回は暴れてただけですが、明らかに私たちを攻撃してきたので。」

「そうか…」

え？変態^{アル}はどうしたのか、ですって？

出掛ける前に気絶させて縛ってそこから辺に放って起きましたよ。

く両面宿儺、フルボッコ？（後書き）

やっぱり中途半端な気がする…

そろそろアンケートの締め切りが近づいて来ました。

くユキの原作破壊劇く（前書き）

アンケート実施中です。

ユキの麻帆良での立場は…

- 1 教師
- 2 女子寮管理人
- 3 喫茶店などの店主

以上の3つから選んでください。

「ユキの原作破壊劇」

SIDEユキ

よう、零崎雪織だ。

つてか のSIDE表記がいいのかね？少し疑問に思えてきたぜ。

まあメタい発言はこの辺にしておこう。

京都でリョウメンスクナをボコボコにした後、『紅き翼』は解散になっただぜ。んでもう何年か経ったわけだ。

詠春の子供…木之香も生まれたな。つてかマジに何年たってんだ？

ええと…今は西暦…1993年だど？つまりあのメンバー…ネギパ―ティーの大体が5歳になる年ってことか。

俺はアスナと旧世界と魔法世界を回ってるわけだが、定期的にクルトの手伝いをしている。メインは『完全なる世界』の残党狩りだ。

んで今は…どこだっけ？忘れたけどメガ口のどっかにいる。

クルトから通信が来たと思ったら切羽詰まった声で「手伝ってください！」だからな。結構ヤバイ状況らしい。

アスナはクルトに預けて、俺一人で戦地に赴いた訳だ。クルトに口リコンの気はないから大丈夫…のはず。

空中から状況を見たところ、味方はいつぱいいつぱい、上級悪魔…伯爵級の強さも感じる。こりゃ召喚主は捨て身で…
「ってオイオイオイ！なんでガキがいるんだよ！」

こんな場所に子供、近くには血まみれで倒れている…女性か？近くに魔法銃が二丁転がってるな。

俺は人は殺すが無関係の奴が巻き込まれるのは気に入くない。

待てよ？このタイミング…すでに6/1は過ぎている…まさか！

近くにいた子供…女の子が俺に声をかけてきた。

「おねえさん…おかあさんをたすけて！」

涙をポロポロとこぼしながら頼んでくる。

「ああ、助けるから安心しな。」

俺は精神的には男なんだがね…まあ見た目は女だし仕方ねえな。

手をあてて確認、まだ息はある。すぐさま生と死の境界を弄り、彼女が死なないようにする。

次にやることは普通は回復魔法の『治癒』なんだろうが、怪我が酷すぎる。それに加えて

「西洋魔法の回復魔法に対する無効化術式…」

思わず呟いてしまったが、言った通りだ。こんなのをかけれるのは伯爵級以上の悪魔だな。

境界弄って消しても良いが、さつきも言った通り怪我が酷すぎてア
シだと治らない。よって

「陰陽術は専門外だが、仕方ねえか。」

正直アンチヨコが欲しいくらいだが。

「えーっと…『氣吹戸大袂 高天原爾神留坐 神漏伎神漏彌命以
皇神等前爾白久 苦患吾友乎護惠比幸給閉止 我能生魂乎宇豆乃幣
帛爾 備奉事乎諸聞食』！」

原作で木之香が使った完全治癒魔法(?)。3分以内、『コチノヒ
オウギ』専用のアレだが、その辺は境界を弄りまくってどうにかし
た。

眩い光が放たれ、みるみる傷が癒えていく。

「う……………ん……………」

「おかあさん！」

「ゆう……………な……………?」

「起きたか。」

「おねえさんありがとうございます！」

すぐにお礼を言う女の子。

「あなたは」

「『漆黒の死神』零崎雪織だ。いろいろ聞きたいことは有るだろう
が今は聞かん。」

言葉を遮って、結界を張る。

「なんで子供がいるのかとか俺が聞きたいぐらいだが、俺も依頼はこなさないといかんのでね。」

「はあ…」

「ここから出るな。何が起こっても壊れはしないし、そもそも他の奴は知覚すらできん。依頼が終わったら戻るから、それまで待つとけ。」

俺の予想が正しければ、彼女は原作では本来死んだ「明石夕子」、そして女の子はその娘の「明石祐奈」だろう。

何故祐奈がここにいるのかは分からないが、俺が何らかの形で介入して何かが起こったのだろう。

俺は結界から出て鎌を取りだし、悪魔狩りに向かった。

悪魔狩りはわりとすぐに終わった。

他の人たちの頑張りもあって、残っていた上級悪魔2体と伯爵級1体を殺して終了。

戻ってきて、状況を説明してもらおうと…

明石一家で旅行に来ていた所、丁度止まっていた宿の近くで戦闘が始まった。

夕子さんは戦闘が出来るため呼び出され、参加。上手く立ち回り、順調に悪魔を撃破していった。

しかし明石教授（今は講師だが）の目を盗んで安全な場所から飛び出し、祐奈は夕子さんを探しだす。

運悪く伯爵級の悪魔に見つかり、殺されそうになっていた祐奈を夕子さんが庇い、負傷。なんとか魔法銃で頭を撃ち抜き、還したところで気絶。

つてな感じた。後は俺が見つけて治療した、つてこった。

「んで、聞きたいことがあるんなら聞くが？」

「私には治癒魔法の阻害術式がかけられていたはず。どうやったんですか？」

「ん？陰陽術。それも最高レベルの治癒術を使ったんだ。」

「陰陽術ですか…いや、それ以前に何故私を助けたんですか？」

「依頼主はクルト・ゲードル、依頼内容は援護と負傷者の治療。依頼されたからにはきっちりこなす。」

「理由はどうあれ、妻を治療してくれてありがとうございます。」

「そう何度も感謝の言葉を言われてもな……」

ふと気になったことが生まれた。原作では夕子さんが殉職したがゆえに祐奈は魔法関係から離れることになった。

「ところで、だ。娘さんはどうする気だ？ ショッキングな光景を見たから恐らくトラウマになるぞ。記憶を封印するのかどうか、決めた方が良さ。」

「あなたは…どう考えているんですか？」

「俺は記憶の封印は基本的にしない。本人がよほど強く望まない限りは、だ。記憶はその人物を構成する重要なパーツだからな。」

「そうですか…」

「後は…仮に記憶を封印しても、おそらく俺の姿を見た時点で再び思い出す。」

「何故そんなことが言えるんですか？」

「記憶封印…これはハッキリいってあんたら程度の魔法使いが使っても大した効果は無い。」

「どういうことですか？」

「あの魔法を使いこなせている魔法使いはほぼいない。恐ろしく緻密な魔力制御がいるからだ。そう簡単に記憶の封印が出来てたまるか。出来るのは俺と『紅き翼』の泉野雪、あとは造物主くらいのものだらう。」

「はあ……」

「つまりだ。不完全にかけられているのなら、俺みたいに目の前で母親を救ったような重要人物が現れたときに封印が外れるからだ。」

「なら、記憶消去はどうですか？」

「アレだけはダメだ。使うな。アレは記憶封印以上に精密な魔力制御がいる。はつきりいつて使った後に人格が壊れる可能性の方が高い。下手したら人間関係を壊滅させる恐れがあるくらいだ。むしろ殺した方がいいってレベルになることもあり得る。」

顔を真っ青にする明石夫妻。

「まあ、一般に伝わってる記憶消去の魔法はその大体がただの記憶封印魔法だな。」

少しだけ顔色が戻った。

「ただ、これは俺が巻き込んだことだし、俺にも責任がある。俺に任せるんだったら、彼女が中学生になったら魔法の指導をしてやるつもりだ。」

「何故そのような事を？」

まあ、普通の反応だな。

「俺には義理の娘がいて、魔法を知っている。で、麻帆良に通わせるつもりだ。見た感じ大体あんたらの娘さんと同じくらいだし、面

倒な事態になってるのは俺にも責任がある。どうだ？」

明石夫妻はお互いに向き合い、頷く。

「では、それでお願いできますか？」

「了解した。これは頼みだが、魔法を教えるのは良いが、魔法生徒にはしないようにしてくれ。」

「別に構いませんが…どうしてですか？」

「夜の警備員なんかやって死んでもらったら後味が悪すぎる。ついでに言っと、変な正義思考を持たれて反発を買われるのも嫌だからな。良いか？」

「ええ…分かりました。」

「んじゃ、俺は失礼するぜ。ま、散々ボコボコにしてやったから襲撃は無いだろっし、ゆっくり観光でも楽しみな。じゃあな。」

手を振りつつ転移魔法。まさか祐奈と接点を持つとはな…

メガ口に戻ると、疲労した様子の子のクルト発見。

「どうした？クルト？」

「いえ…アスナちゃんが稽古をつけてくれて…いつから軽く相手をしてあげたんですが…」

「あー…」

「クルトは結構強かったよ。でも物足りない。」

「ちょっとアスナは強くしすぎたかもしれん。」

「いや、かも、じゃなくて強くし過ぎですよ…僕何回か死ぬかと思
いましたよ?」

「うーむ…神鳴流の技は教えてないんだがな…」

「身体能力が高過ぎるんですよ！咸卦法使って打ち込んで来ますし、
アーティファクトは意味がわかりませんし…」

「あれな。」

「ふふん。」

上機嫌なアスナ。つーかクルトも結構な実力者なんだがなあ…

「まあ良いだろ。じゃ、クルト。また連絡くれよ。」

「ええ、それではまた。」

アスナと共に、次はどこへ行こうか。

くユキの原作破壊劇く（後書き）

ゆるやかな魔改造フラグですよ。

『ユキの原作破壊劇 part 2』(前書き)

アンケートはもうすぐ締め切ります。具体的な日時をいうと12/3 19:00で締切です。

ユキの麻帆良での立場は…

1 教師

2 女子寮管理人

3 喫茶店などの店主

以上の3つから1つ選んでください。

ユキの原作破壊劇 part 2

SIDEユキ

どうも、泉野雪です。

今は夕子さん救出から1年と数ヶ月、1995年1月です。

その間は特に何も無し、世界中を巡っていただけね。

今の居場所はトルコのイスタンブールです。

「ったく…こんなことになるんだったらクルトに予定を聞いておく
んでしたね…」

アスナが追い付けるレベルで急ぎます。今何をしてるかですって？
悪魔を切り払っているんですよ。

『完全なる世界』のゲート襲撃です。

「…か嫌な予感しかしないんですよ。何故かって？ここに来るまでに
合流した味方は『悠久の風』。勘が良い人なら分かったでしょう。
ガトウと連絡はとれていたので心配して無かったんですが、ここに
きて修正力が働いた可能性もあり得ます。」

人払いが済んでいるとはいえ、奴等もやることがえげつないですね。
大量の悪魔を召喚してるわけですから。低級悪魔の大量召喚、数の
暴力ですよ。

「えい！」

アスナも横から襲いかかってくる低級悪魔を切り捨てます。『ハマノツルギ』効果で一撃でも当てれば一発で還せます。もっとも、そうでなくても真つ二つになってるんで還るんですけど。

「神鳴流奥義！斬魔剣 弐の太刀！」

今のアスナですよ？詠春から許可もらいましたんで神鳴流は教えませんでした。つか物覚えが良すぎです。魔法球使ったとはいえ、半年で覚えてしまいました…他の人泣きますよ？

「ユキ！こつちの方が多い！」

突然アスナに呼び止められました。急いで近づくと狭めの道に悪魔が溢れています。もっとも、こちらからみて後ろを向いています…

「味方は向こうにいるでしょうから…突撃しますよ！」

「分かった！」

剣に気を纏わせ走る。使うのは広範囲攻撃の奥義

「「神鳴流決戦奥義！真・雷光剣！！」」

広範囲に気によって出来た雷が炸裂し、大量の悪魔が吹き飛ぶ。

それに気づいた悪魔が一齐にこちらを向く。っていうかどれだけ集まってるんですかね？

一気に走り込み、回りを大量の悪魔に囲まれた状態にして

「神鳴流奥義！百烈桜花斬！！」

一気に切り捨てる。こうした方が早く倒せますし。

切り捨てたところをアスナが一気に走っていきました。

「百花繚乱！」

直線上に気を放ち、敵を吹き飛ばしつつ。

私が悪魔を殲滅したところで、アスナから念話が繋がりました。

（急いでこっちに来て！ガトウが大変！）

こちらの返事も待たずに切りました。結構マズイことになってますね…

急いでアスナの方に向かいます。

到着したところには、腹から大量の血を流すガトウと慌てているアスナとタカミチ。

「雪…か…？」

「ユキ！」

「雪さん！」

「落ち着いて。」

そう言って手を当てる。生と死の境界を弄り、『治癒』をかける。

「全く…貴方のような実力者が何をしてるんですか。」

「スマン…不意をつかれてしまった。」

立ち上がるようにするが、上手くいかずに座り込む。

「血が足りてないですから、今動くのは諦めて下さい。」

「良かったです…ありがとうございます！」

「感謝の言葉は要らないですよ。私たちは仲間でしょう？」

「それでも、です！雪さんが来なかったら師匠は死んでもおかしくなかつたんですから！」

「はいはい…」

そしてタカミチの顔を見て思うことが1つ。

「それにしても…タカミチ君。」

「何ですか？」

「老けたね。」

「私も思った。」

グサツと何かが刺さった、そんな音がなった気がしました。

「アハハ…そんな…」

「ダイオラマ魔法球でも使いまくったんじゃないの？」

「ガトウと同じ年くらいに見える。」

さらに何かが突き刺さる音が聞こえた気がしました。

「まあそんなのはほっといて、アスナ。」

「分かった。」

剣を地面に突き立てるアスナ。すると半径3mほどの半球状の境界が張られます。

「私はこれから残りの悪魔を潰しますんで、3人は待っててください。」

何か文句を言われる前に移動しました。さて、悪魔狩りです。

悪魔狩りを終えて、『悠久の風』に感謝されて、その場で解散。

とあるホテルの一室で、私はガトウとタカミチと話をします。アスナはすでに寝てますよ。

「それで、どうしたんだ？」

私から話があるって言いましたからね。

「アスナの成長障害が無くなったようなんです。それで、小学校に通わせようと思ってるんですが…」

「小学校に？」

「ええ。麻帆良小学校に入れようと考えているんです。」

「何故ですか？アスナちゃんは頭脳明晰、はっきり言って器じゃ無い気がしますが…」

タカミチの疑問は分からなくは無いですね。

「そうではあるんですがね。はっきり言いますが、アスナには同年代の『友人』がないんです。」

「「!!」」

「で、友人関係を築くためにも通わせたいんですが…どうでしょう？」

「いいんじゃないか？」

「そうですね。僕もそう思いますよ。」

「それなら良いんです。で、これはお願い何ですが…」

私の出したお願い。二人は驚いた顔をしましたが、納得してくれました。

翌日、朝。

「じゃあ、頼みましたね。」

「ええ、任せてください。」

「ユキと別れるのは寂しいけど、待つてるからね。」

私のお願い。それは来年度からアスナを入学させること、魔法生徒としては通わせないということ、もう一つ、アスナと一時的に離れること。

しばらく一人で旅をしたいという理由にしておきました。

本当の理由は、私とずっと一緒にいると原作から性格が大きく解離し、展開が読めなくなる可能性があるからです。こういうとアレですが、実際『友人』を作っただけじゃありませんよ？

まあアスナが中学生になったら麻帆良に行くつもりですけどね。明石夫妻との約束もありますし。

おっと忘れてました。アスナの名前は「泉野明日菜」になりましたよ。神楽坂では無いですよ。

私は手を振って離れます。

「待ってるからねー！」

アスナには珍しく大声で宣言。ちゃんと戻らないと、ね。

さて、後6年、どこで何をしましょうか。

くユキの麻帆良入りまであと少しく（前書き）

アンケートの締切は12/3 19:00ですよ。

ユキの麻帆良での立場は…

- 1 教師
 - 2 女子寮管理人
 - 3 喫茶店などの店主
- 以上の3つから1つ選んでください。

今回は埋め合わせの回…ゆえに短いです。すみません。

ユキの麻帆良入りまであと少し

SIDEユキ

どうも、泉野雪です。

アスナと離れて早6年、様々な事がありました。特にこれといったことは起きませんでした。

いや、ネギの故郷の襲撃があったはずじゃ無いのか、ですって？

アレには私はノータッチです。というか変に介入してややこしくなっても嫌ですし…

で、今どこにいるのかと言うと、京都の近衛家のところです。

いやはや、やる事が無くて暇なのですよ。世界中を転々として、賞金稼ぎもしてはいるんですけどね。

「はあ、暇です。」

「お前がだれているのは珍しいな。」

「良いじゃないですか。アスナと一時的に離れて起きたかつたんですよ。詠春の気持ちを感じてみようかと…いや、木乃葉さんの気持ちで行った方が正確ですかね？」

「まあ…そうやろつなあ。詠春はんはあくまで男やしなあ。」

ちなみに木乃葉さんは木乃香を生んだ後体調が優れず、一時危篤状態になりましたが私が治療しました。

やっぱり大きな魔力を持つ子を産むと危ないようです。

「しかしなぜ離れようなんて思ったんだ？お前が固執しているとは感じてなかったが…」

「血を見せたくなかった、感じさせたく無かった、そんな感覚ですね。私の仕事を休めば良かったんでしょうが、それは嫌でしたんで」

「詠春はんとウチが木乃香に魔法に関わって欲しゅうない、それとおんなじ気持ちってことかいな？」

「そうですね。いずれは関わることになるでしょうが、それでも一時的にでもいいから離してあげたい。そんな気持ちですよ。」

ですが、ただの偽善でしか無いんですよ、それは。

一人の親としてはその判断も間違いではないでしょう。が、『大戦の英雄』としては恐ろしく不適切な判断ですよ、詠春。

私なら早くから陰陽術を覚えさせて、それで暮らさせますね。魔法に関わっていたって幸せな生活は出来るんですから。

原に私はアスナには色々と覚えさせていますし。まあ『ハマノツルギ』を地面に突き刺して籠城すれば大抵の魔法使いには負けないですよ？

だって『無効化』結界ですから。一発で許容量を越えれば割れますけど、一発で割らないと全部ペアになるんです。あくまで地面に突き刺し続けた場合ですが。

地面に突き立てて張った場合、そのあと剣で攻撃出来ませんが、許容量まで無効化した分が蓄積されるようで、そのうち割れます。

許容量はナギの『千の雷』で3回分といったところ。

反射結界の場合、地面に突き刺し続けても地面に突き立てて張った場合でも変わりません。

ただ、強度は無効化に比べてかなり落ちます。ナギの『雷の暴風』がギリギリ反射出来るレベルでした。十分すぎますね。

「うーあー」

とまあグダグダ説明はしたんですが。何より…

「地球外言語話しても俺には分かんぞ。」

「暇だ」

「って言われてもなあ…」

「やる事が無いっていうのはええことやないですか。」

「まあそうですね。そういう風に考えることにします。どのみちあと数カ月したら忙しくなるでしょうし。」

麻帆良に行くまであと数カ月。それまで近衛家でのんびりさせてもらいますかねえ…

アスナとの再開は楽しみです。

くユキの麻帆良入りまであと少しく（後書き）

時間がぶっ飛びました。

ユキはネギ関連のイベントは総スルー。

理由は本文に書いた通り、変に介入してややこしくなるのが嫌だからです。

くユキの麻帆良入りく（前書き）

投票の結果、ユキは教師になりました！

質問：『完全なる世界』はかなり処刑したからネギの村の襲撃そのものが無いのでは？

回答：世界の修正力、ということをお願いします。悪魔を召喚した人物は別に現れた、処刑されなかった、等で。

ユキの麻帆良入り

SIDEユキ

どうも、泉野雪です。

ふとあることに気がついたんですよ。私が麻帆良に行くとして、あまり早くから行くとどうなるのか？って。

最悪私がいるがゆえにアスナの友人関係が狂うんじゃないか？と思いますして。

いや、すでに狂っていてもおかしくないだろと言われればそれまでなんですけど…

と言うわけで麻帆良に来るのをおよそ1ヶ月ほど送らせて、今はゴールデンウィーク。そして場所は麻帆良学園の学園長室前。

コンコン、とノックをする。良いぞ、と返事が来たのでドアを開ける。

目にはいるのは学園長の長い後頭部、ぬらりひよんでしょ、アレ。

「はじめまして、『属性を統べる者』、泉野雪殿じゃな？」

「ええ、その通りです。麻帆良学園長、近衛近右衛門さん。まずはお礼を。アスナをこの学園に受け入れてくれたこと、感謝しています。」

「構わんよ。タカミチ君から聞くに、ガトウ君の命を救ってくれた

そうじゃないか。」

「それでもです。それに依頼していた通り、魔法生徒でも無いみたいですし。それだけでは足りないかと思いついて、学園長からなにかお願いがあるのならお聞きしますが…?」

学園長に利用される気はさらさら無いですけどね。

「そうじゃのう…では、1-Aの担任をしてくれんか?」

「担任ですか?この時期に担任を変えるとすると混乱を招くのでは?」

「普通のクラスならのう。そのクラスの担任はタカミチ君、副担任はガトウ君なんじゃ。」

「はて…『悠久の風』に所属しているタカミチ君が担任ですか…?その上同じ立場のガトウさんが副担任…つまり二人とも『出張』として活動しているからあまりこちらにいられないから問題無いと?」

「その通りじゃ。」

「ふむ…」

「ついでに言えばアスナ君はそのクラスじゃが…どうじゃ?」

「うーん…分かりました。受けましょう。」

「ありがたい。それで次じゃが、魔法関係者にお主の事を伝えてもよいか?」

「どうせ名前で分かるでしょうし、構いませんよ。」

「ほう、それは良かった。」

「ただし！」

「ここで言うことはある。」

「学園の警備をしるとかは言わないで下さいよ？」

「む…それは何故じゃ？」

「はつきり言いますが、とある事情のせいで私は『正義の魔法使い』が大嫌いなんです。もし警備なんかして誰かが私の行動に口を挟んだらうつかり殺しそうになります。」

「むっ…じゃが」

「ああ、ついでに言っておきますがアスナも『正義の魔法使い』は大嫌いなんですよ？彼女と私は一緒に行動してましたし。」

「これははつきり言っておく。正直アイツラの戯言に付き合う気は全く無い。」

「そ、そうか…顔合わせ位はいいかの？」

「それくらいなら。ただ、それはもう少し待ってくれますか？」

「構わんが…どのくらいじゃ？」

「ゴールデンウィーク明けに私が担任であることを説明したあとで

すね。」

「わかったぞい。」

「それでは、失礼しますね。」

そういつて学園長室を後にする。後数日かあ…楽しみです。

アレから数日、ゴールデンウィークが明けた初日。

「それにしてもまたふけた？タカミチ君。」

「ハハ…言わないで下さいよ…気にしてるんですから…」

今は廊下を歩いてます。1-Aに向かってます。

「そういえばガトウは？見なかったけど。」

「師匠は『悠久の風』の活動です。今どこにいるのかは知りませんが。」

「そ。」

「そんな興味が失せたって顔されても…今日の夕方には帰ってくる
そうですよ？顔合わせもあるでしょう？」

「そういえば今日の夜でしたね…ああ面倒くさい。」

「面倒って雪さん…あ、つきましたよ。」

グダグダ話していると到着。そして一言。

「ねえタカミチ、これって引っ掛かった方が良いんですか？」

「あ…そう言えば事情は説明したけど性別とか説明してなかったです…スミマセン。」

「まあ良いです。この程度の罨たち、粉々にしてやります。」

そういつてドアを開ける。

まず降ってきた黒板消しは普通にキャッチ、ワントンポ遅れて降ってきたバケツもそのままキャッチし、床に置く。

歩いて紐を踏んで、飛んできた吸盤付きの矢は手でキャッチ、最後に降ってきた金だらいは

「ちえいさー！」

回転蹴りで後ろまで吹き飛ばす。ガアン！といい音を立てて壁に激突、落下。

啞然とするクラス、タカミチが入ってきて話し出す。

「えーと、罨はひとまず置いておいて、こちらが今日から皆の担任

になる泉野雪先生だよ。」

「さて、紹介してもらったけど自己紹介。担任になった泉野雪よ、よろしくね。」

『き………』

きっ。

『きれ………い!』

綺麗、ですか。一瞬にして沸き上がるクラス。

ちらりと見て反応したのはエヴァ、刹那、マナ、超の4人。

「はいはい! 皆の質問は麻帆良報道部の私、朝倉和美が代表しておこないまーす!」

横目でタカミチを見る。どうせ次の授業はタカミチが担当だし、別にいいって感じですね。

「まず、泉野って明日菜と同じ名字だけど何か関係はあるんですか?」

「そっねえ…アスナを見てみたら?」

「どづいつ…って、え!? アスナ!? ちょ、なんで泣いてるの!？」

「ユキ…会いたかった」

アスナが飛びかかってきたので受け止める。

「ごめんね、長いことほったらかしにして。」

「別に良いわよ…本当に戻ってきてくれたから…」

頭をゆっくりと撫でてあげる。

「え……と……これは？」

「アスナは義理の娘。もう6年以上会ってなかったけどね。ほら、席に戻って。」

「うん…ありがとう…」

ゆっくりと席に戻るアスナ。

「ええと、気を取り直して！ずばり、好みの男性のタイプは！？」

「うーん…あまり気にしたこと無いから分かんないわね。」

「ふうむ…では趣味は？」

「読書と料理かしら。お菓子作りも好きよ。」

「なるほど…では担当の教科はなんでしょう？」

「数学よ。もつとも、他の教科も教えられるから質問に来てもいいわ。」

「

「ふむふむ…男性だったら年齢とかきけるんだけどなあ…（ボソッ）」

ぶつぶつ言ってるけど内容聞こえましたよ？

「あ、年齢は詳しくは教えないけどタカミチより年上よ？」

『うそっ！？』

「まさかの衝撃事実…その若々しい見た目をどうやって維持してるんでしょうか！？」

「バランスの良い食事、適度な運動と睡眠、これだけよ。」

まあ不老なんですけどね。

その後は普通に授業。授業の終わりを開けておいてくれ、とタカミチにはあらかじめいっておいたので連絡。

「さて、歓迎会をしたいんなら明日にしてくれる？出来れば久しぶりであった義理の娘とゆっくり話したいからね。」

さすがにこれに異を唱える人はいませんでしたよ。

その後は普通に私も授業をこなし、仕事も終わらせました。

で、今はコーヒーショップ。アスナと話をするためです。

「ふう…質問攻めにあっちゃったわ。」

そう言いながらコーヒーとカフェオレを持ってくるアスナ。私がコーヒーです。ブラックですよ？

「悪く思ってますよ。それは。」

「ホントよ。かなり疲れたんだからね？」

「ふう…まあクラスメイトとは仲良くやってるみたいね。」

「ん、まあね。ユキは『完全なる世界』の残党狩りでもしてたんでしょ？」

「そうね…叩いても叩いても減らないんで面倒になってきたけど。」

「それは…仕方ないわね。」

「ま、私のことばかり話しても仕方ないですね。クラスメイトについて報告してくれます？」

「エヴァンジェリン…」

「『闇の福音』のエヴァンジェリンね。正直見て驚いたけど…」

「タカミチに事情を聞いたらナギに『登校地獄』って呪いをかけられたらしいわ。ただ、適当にかけたのかもう10年以上中学生をや

「つてるみたい。」

「としたら…それは解呪ね。許容量越えた魔力流せば呪いは壊れるから…他には？」

「そうねえ…長谷川千雨ちゃん。」

「何かあるの？」

「大有りね。彼女は認識阻害が効いてないみたい。クズ（正義の魔法使い）は気付いているかどうか知らないけど、そのうち壊れる可能性があるわ。」

「うーん…今度面談してこちら（魔法側）に引き込もうかしら？」

「出来ればそうしてあげて。もちろん千雨ちゃんの意味を確認してよ。」

「分かってますよ。他には？」

「近衛木乃香の護衛に桜咲刹那がついてる、っていうのは？」

「詠春から聞きましたよ。ただ、今日見ただけでも…はあ…」

「そうなのよね…アレじゃ護衛じゃなくてストーカーよね。どうする？」

「うーん…アレが護衛として為ってないって自覚させるのが一番だろっけど中々機会が無さそうなのよね。」

「時が解決するのを待つってこと？」

「そう。木乃香ちゃんには悪いけど、時間がかかりそうね。」

「そっか。ま、仕方ないか…」

「あ、そうそう。明石祐奈ちゃんには魔法を教えるつもりよ。」

「へ？どうして？」

「いや、簡単にいうと雪織がへまをやらかしたんだけど…魔法世界で親が死にかけてたのを助けたのよ。」

「なるほどね。自分が巻き込んだことだから、ってやつね？」

「そ。他に何かある？」

「うーん…無いわね。」

「じゃあ今からエヴァンジェリンの呪い解きに行くけど、どうする？」

「行くつかしら…でも今日顔合わせでしょ？何でそんなことするの？」

「ん…愚弟がやったことならすぐにでもやらないと、ね。アスナは顔合わせには来る？」

睡眠薬をちらつかせる。

「クス（正義の魔法使い）の実力把握にはなるか…行くわ。」

睡眠薬を受けとるアスナ。

「じゃ、エヴァンジェリンのところに行きましょうか。」

「ええ。」

私はアスナと二人、エヴァの家に向かいました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5019y/>

とある私の物語～ネギまに転生ですか？～

2011年12月4日01時44分発行